天使の焼いたマドレーヌ

淡雪ぼたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使の焼いたマドレーヌ

【Ｎコード】
Ｎ０８０２Ｕ

【作者名】
淡雪ぼたん

【あらすじ】
若く有望な作曲家（せりざわ）　芹沢（おさむ）理と　心に傷を持つ薄幸な生い立ちの七瀬（ななせ）真織（まおり）の純愛シンデレラ　ラブストーリ《フォレストにて発表の作品を加筆修正して掲載してます。タイトルは変更しました》

第1話　出会い

三軒茶屋の駅から近い所に、富裕層が多く住む閑静な住宅地があった。
ここの一角に、ひときわ目を引く、素敵な南仏プロヴァンス風の家が立っていた。
落ち着いた淡いベージュの塗り壁風外壁に西洋瓦の屋根、窓には濃茶の木調の飾り雨戸に重厚感あるアンティークアイアンの花台がついていて、赤いゼラニウムの花が揺れている・・・。
一階には大きなサンルームがあり、アンティークなストーブが付いていた。
ガレージには外車が3台、大きなＲＶ車と、スポーツカーとミニカー。

ここが、２８歳の新進気鋭の作曲家、芹沢理（せりざわ おさむ）の自宅件スタジオだ。

今、理はイライラがピークに達していた。
イライラの原因は、締め切りに追われていた理由だけではなかった。
ずっと家の事を任せていた、家政婦のおばさんが家庭の事情で急遽辞める事になってしまい、後任の家政婦が見つからないまま家の中はメチャクチャ状態だったからだ。

おばさんのいた家政婦派遣会社には、早く後任をよこして欲しいと頼んでいるのだが・・・。

そんな時に、インターホンが鳴った。

「こんな忙しい時に・・・」
今日のスケジュールでは、重要な仕事関係の人が来る予定はない。

アポ無しの仕事依頼の者かもしれない・・・。
出るのが面倒で、そのまま無視する事にした。
仕事関係で緊急の用事なら、電話がかかって来るはずだ。

また、インターホンが鳴った。
やれやれと、重い腰を上げて玄関に向った。
「はーい」
セールスや、アポ無しの仕事依頼関係者だったら、一言嫌みのようなキツイ事を言ってやろうと思いながら、玄関の扉を開けた。
ガチャリと扉を開けて、一瞬固まってしまった。
凄く印象深いその姿に、目が離せなくなったと言うか、点になってしまった。

そこには、かなり地味な女性が立っていた。
年齢は若そうだが、長い髪の毛を後ろでキツクひとつに結んで、化粧ひとつなし、ババ色と言っていいようなかなり地味な色彩のトレーナーにジーンズにスニーカー。
バッグがまたやぼったい。
安いファッションショップでワゴンに山積みされてるような、センスのかけらもないワンショルダーのカジュアルバッグ・・・。

不審者を見る目つきで、ジロリと睨んでしまった。
「どなた？」
嫌そうな顔で、まじまじと見る。

「あの・・・私、家政婦協会から紹介された者ですが・・・」

内心『まじかよ。』と思いながら、
「まあ、上がって」
家に入れた。

理は、彼女の脱いだヨレヨレの擦れた靴が目に留まり、それがあまりにもみすぼらしくて、身震いした。
綺麗に洗った形跡はあるけれど、かなり履きこなした感じと言うのだろうか・・・型くずれして、ゴムの部分も擦れて柄が消えてて、破れる寸前っぽい雰囲気だ・・・。
恐らくこの物の溢れる今、ここまで靴を履きこなす人間はなかなかいないだろうなと思った。
もしかしたら、ごみ置き場で拾ってきたものじゃないだろうかと思えるぐらい・・・。
『うわーっ。この子、ヤバイかも・・・』
心の中でつぶやいた。

応接間に通して座らせて、紹介状を見る。

「名前が七瀬真織（ななせ まおり）・・・。２１歳」

「君、高校中退?!」
いけないと思いながらも、つい嫌そうな表情になってしまう。

「はい。家庭の事情で、高一で学校を辞めました」

「ふーん。運転免許も無し?」

「はい」

内心、こんなのをよこしやがって・・・。と怒り心頭だが、ネコの手も借りたい状態・・・。グッとこらえる。
「で、君若そうだけど、家事全般出来るの?」

「はい。大丈夫です」

「料理も？」

疑いの眼差しでしげしげと見る。

「はい」

「ネコの手も借りたい状況なんだけど、今からでも大丈夫？」

「はい」

「じゃあ分からない事があったら、聞いてね。見たら分かると思うけど、まず掃除と洗濯頼むよ。洗濯機はあっち、物干し場はあそこのサンルーム、掃除機用具一式は、階段下のクローゼット。じゃあ御願い」

「はい　分かりました」

「あ・・・。それから、ピアノのあるあそこのスタジオ部屋は、仕事の書類が山になってるし掃除も要らないし、入らないでね」

「はい、分かりました」

訳ありな雰囲気の子で、内心心配だったけれど、仕事に追われていたので、早口で言いたい事だけ言って仕事部屋に戻った。

それから仕事に熱中・・・。ふと時計を見たら大分時間が経っていた。

あの子は大丈夫か？　頼んだ事をちゃんとやってるのだろうか？急に不安になった。

スタジオから出たら、サンルームの物干し場には綺麗に洗濯物が並んで干されていた。

荒れ放題だった部屋も綺麗に片付いていた。

あの子仕事早いし、結構出来るな・・・。

先程偏見の目で彼女の事を見てしまった自分がすごく恥ずかしく思えてしまった。

で・・・。あの子は何処に？

耳を澄ましたら、カチャカチャ食器の音が聞こえてくる。

キッチンに行ったら、一生懸命山になった食器を洗っている姿が見えた。

「君、仕事早いね」

一瞬ビクッと驚いた様子をしたが、すぐにクルッと振り返ってこっちを見た。

「あ・・・。旦那様、夕食はどうしますか？」

「何が得意なの？」

「何でも作れますが・・・」

その返事にちょっと、意地悪な気持ちが現れた。

まだ若い子なのに、和食は作れるのだろうか？

「僕、和食が好きなんだけれど・・・」

「じゃあ、肉じゃがとか・・・」

「じゃそれ頼む。これで買い物行って来てよ」

ポケットにねじ込んだ数枚の万札から1枚抜いて、彼女に渡した。
「はい。あの、トイレットペーパーも切れてるみたいですが・・・」
「じゃあそれもお願い」
「はい。じゃあ行ってきます」

彼女が家の前に止めた自転車に乗ろうとするのが見えた。
『ここまで自転車で来たのか？』
サンルームに行って、彼女が自転車で出て行く様子を、見に行った。
「随分と年季のはいった自転車だな・・・。何から何までみすぼらしい子だ」
つい独り言を言ってしまった。
なんか貧乏臭い感じの地味な子なのに、ひどく気になる。
なんか面白い子だった。

また仕事を始めて、気がついたら夜１０時だった。
「しまったこんな時間だ！！」
あの子はどうしたかと、部屋を出たら、キッチンのスツールに座って、首を傾けて固まっている後ろ姿が見えた。
「君・・・」
肩をトントンとしたら、ビクンと飛び上がった。
その驚き方にこっちもビックリして、一歩下がった。
「寝てたの？」
「すみません。待っているうちに、つい寝てしまいました・・・」
「いや、いいけど・・・」

「食事の支度は出来てます。召し上がりますか？」

「うん」

「おみそ汁を温め直しますね」

「こんな時間だから、自分でやるよ。もっと早く帰せば良かったね。ごめん。つい仕事に熱中してしまって・・・。時間も遅いし、家まで送るよ」

「でも、自転車で来たので・・・。自分で帰れますから大丈夫です」

「自転車でどのぐらいかかるの？」

「45分ぐらいです」

「結構遠いね・・・。自転車は車に乗せればいいから、乗って行きなよ。こんな時間まで、引き止めてしまった責任もあるし・・・」

ちょっと戸惑って考え込んでるようだったが

「ありがとうございます。お言葉に甘えて、お世話になります」

この返答に、礼儀正しい子だなと感心した。

彼女の自転車は、遠目に見ても、かなり年季のはいった自転車だと思ったが、実際近くで見ると、骨董品に近いぐらいじゃないかと思えるぐらいだった。乗るとキコキコ音がしそうだ・・・。

ＲＶ車の荷台に乗せて、彼女を助手席に座らせる。

「家は何処？」

「二子玉川駅近くなんですが・・・」

「二子玉川から三軒茶屋までだとかなりあるでしょう？」

「いつも長距離乗ってますから大丈夫です」
真直ぐ澄んだ瞳で、微笑んだ顔がちょっと可愛いなと思った。

「自転車で毎日うちまで通うの？」

「はい。慣れてますから・・・」
全く苦にも思わずに、平然とサラリと言ってのける・・・。
今時の若い子にしては珍しい感じだ・・・。

「明日からは　午前9時から午後6時までで・・・。今日みたいに仕事で部屋に籠ってたら、声かけなくていいから、時間になったら帰って良いから・・・」

「はい」

運転しながらチラチラと彼女の横顔を見たら、全く化粧もせずに地味な服装をしてて気づかなかったが、よくよく見ると、彫りが深くて　まつ毛が長くて、結構　綺麗な子だなと感じた。
それに頭の回転の早そうな子だ・・・。

「あ、そこの角を曲って、あのアパートです」

彼女の住んでいるアパートは、風呂なし、6畳一間の家賃3万ぐらいの築35年ぐらいの古いアパートだった・・・。
何から何まで地味な子だ・・・。

「今日はお手間とらせてすみませんでした。ありがとうございました」

「じゃあ、明日からよろしくね」

これが不思議な子、真織との出会いだった・・・。

家に帰って、テーブルの上を見たら、細かに購入した物の値段とおつりの書かれた可愛い絵柄のメモ用紙とレシートとおつりが乗せられてた。

字がとても綺麗だ・・・。

「随分律義な子だな・・・」

ラップのかかった肉じゃがを温め、豆腐のみそ汁とご飯と一緒に食べる。ミニサラダまでついてる。サウザンアイランド　ドレッシングは手づくりだ・・・。

はっきり言って、辞めていったおばさんよりも数倍美味しかった・・・。

彼女を見て、初めは「しまった」と思ったけれど、良い家政婦さんが見つかって良かった！と嬉しい気持ちになった・・・。

今朝はあんなにイラついていたのに・・・。

心がホッこりと温かな感じの何だか嬉しい気持ちだ・・・。

サンルームに干されている洗濯物はまだ生乾きだった・・・。

キチンと肩崩れしないように、しわを伸ばしながら、丁寧に干されてた。

掃除もキチンと綺麗にされてるし、トイレに入ったら、ホルダーのトイレットペーパーがキチンと三角に折られてるし・・・。

「凄い子だな・・・・」

何故なのだろう？

いつの間にか、明日彼女と会うのが楽しみな気持ちになっていた・・・。

（2話に続く）

第1話　出会い　（後書き）

私が創作小説を書き始めた初めての作品・・・思い出深い処女作です。
タイトルがしっくりこなかったので、発表時のタイトルとは変更しました。
処女作ですので、文章&表現力の未熟な点は大目に見てやって下さい。m（__）m

第2話　住み込み依頼

「おはようございます」
頼んだのは　午前9時からだが、３０分前にはやって来た。

「早いね。勤務時間になるまで椅子に座ってゆっくりしててていいよ」

「いえ、じっとしてるのも苦手なので、仕事を始めます。用事がありましたら何でも言って下さい」
サッサとエプロンを付けながら、ニッコリ微笑む。

「分かった。それから電話がかかって来て、僕が忙しくて出れない時には、とりあえず用件を聞いてそこのメモに書いて置いて、後で教えてくれるかな？」

「はい、分かりました」

「それから、時間が余ったら、適当に休憩しててていいから。キッチンのテーブルと椅子を使ってね。お茶も適当に飲んでいいから。昼も適当に作って食べていいから。家の事をキチンとこなしてくれたら、勤務時間内でも適当に休憩をとってもらっていいので・・・」

「はい」
僕が「適当」を連呼したので、彼女はクスッと笑った。

「あ・・・。それから、何て呼べばいいかな？　七瀬さん？　真織ちゃん？」

「真織で良いです」

「あ．．．。僕は　名前か苗字か呼びやすい方で．．．。ご主人様は勘弁してね。そんな年じゃないし．．．」

「あ．．、はい。すみません。それじゃあ、芹沢さんで．．．」

「了解！！」

僕は笑いながら、答えた。

突然、電話がかかって来て、

「出て」と彼女にジェスチャーした。

「もしもし．．」

そう言ってから、ちょっと戸惑うような表情をして芹沢と一瞬目を合わせてから、彼女は気を取り直した感じで、また応対を続けた。

「Ｈｅｌｌｏ．　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　Ｍｒ　Ｓｅｒｉｚａｗａ'ｓ　ｍｕｓｉｃ　ｏｆｆｉｃｅ．」

「Ｍａｙ　Ｉ　ｈａｖｅ　ｙｏｕｒ　ｎａｍｅ，　ｐｌｅａｓｅ？」

「Ｊｕｓｔ　ａ　ｍｏｍｅｎｔ，　ｐｌｅａｓｅ．」

国際電話でも受け答え出来る様子に大変驚いた。

「あの、フレッドさんと言う方からお電話ですが．．．」

「あ．．．。ああ分かった．．．」

履歴には、高一で中退と書かれてるが、キチンとした英語での電話応対に驚く。

「真織ちゃん、英語が出来るんだ」

「それほどでも・・・実は凄く焦ったのですが・・・あれで良かったでしょうか？」
不安そうな顔で伺うような目をした。

「あれだけ出来れば十分だよ」
ニッコリ笑い、うなずく。
芹沢のその様子に、真織も嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあ部屋に籠って仕事をするから、用事があったら声をかけて・・・。
あ・・・。それから、テーブルの上の空き缶にお金を入れておくから、必要な物はそれで買ってね。足りなかったら遠慮なく言ってね」

「はい」

暫く仕事に没頭していたら、インターホンの鳴る音が聞こえた。
「はい」と真織の応対する声が聞こえた。

暫くして、仕事部屋のドアが『バタン！』と勢い良く開いて、西宮　祐也　が入って来た。
祐也は、同じ音大出の友人件仕事仲間・・・。彼は、シンガーソングライター、作詞、作曲、音楽プロデューサーとマルチな才能のあるやつで、今売れてる3人組のバンド『イリュージョン』のリーダーだ。
だが、今日は歓迎してないぞ・・・。
家に勝手に上がり込んだ祐也にあたふたして、真織が追いかけてきた。
「おーい、理。新しい家政婦さん雇ったんだ」

「ああ」

「あの・・・」

勝手に上がってきた来客に困惑顔の真織が理の顔色を伺う。

「ああ。コイツは気にしなくて良いから・・・。驚かしてしまってゴメンね」

「あの、じゃあお茶を入れますね。コーヒーで大丈夫でしょうか？」

「うん。宜しくね」

真織がキッチンに行くのを見届けてから、祐也が興味深げな顔をして理を小突いた。

「彼女、ちょっと変わってるね」

「え？」

変わってると言う表現にちょっとムッとした。

「普通オレを見たら、あの有名人だー。みたいな顔するじゃない？彼女、全然表情変えないで、まるで知らない人みたいな反応なんだよ」

「ふーん」

なんだそう言う意味か・・・。

「なんかショックだな・・・」

ガックリ肩を落として、いつも自信満々な祐也のその様子がちょっと可笑しい・・・。

そうこうしている間に、彼女がドアをノックした。
「あの、コーヒーが入りましたが・・・」

「ありがとう。あのテーブルに置いてくれる？」
部屋の隅の重厚感のある木の丸いファニチャーテーブルと椅子が４脚のセットが置かれている場所を指さした。
そこは、天窓から燦々と陽の光が差し込み、床は素焼きのタイルにレンガ風の壁面、大きな鉢植えの観葉植物が並び、ちょっとした癒しスポットになっていた。

「はい。あの部屋に入っても大丈夫ですか？」

「あ・・・そっか。入らないでって言ってたっけ・・・。
お茶を運ぶぐらいなら、入っても良いよ。これからも来客の時には頼むよ」
実は昨日は得体の知れない彼女にちょっと警戒心のような気持ちがあってあんな事を言ったが、彼女だったら部屋の掃除も頼んでいいかなと気持ちが変化した。

「はい」

ファニチャーテーブルにお茶を運ぶ真織に祐也が近付いて行き、好奇心いっぱいで話しかけた。
「ねえ君。名前は何て言うの？」

「はい。七瀬真織と申します」

「僕の事、知らない？」

一瞬、知り合いかなと言うような表情で祐也をジッと見てから小首を傾げ、申し訳無さそうな顔をした。
「はあ・・・。すみません、ちょっと分かりませんが・・・」
「結構有名人かなと思ってたのに・・・。ちょっとショックだな・・・」
しおれる祐也。
「すみません。私テレビ見ないので・・・。有名な方なんですか？」
「今時テレビ見ない子がいるんだ」
祐也が仰天して驚いた。
「はい・・・。テレビが無いので・・・」
「・・・・・」
益々目が点になる祐也・・・。
この沈黙に、真織が居心地悪そうに反応した。
「すみません。じゃあ失礼します」
出ていこうとした時に、ピアノの前で数秒立ち止まった。
理がその反応に、興味を持った。
「真織ちゃん、ピアノに興味があるのかな？」
「あ・・・、昔習っていたので・・・。凄く素敵なピアノでちょっと見とれてしまいました。」
「ちょっと弾いてみない？」

その言葉に、真織の目が輝いた。
「いいんですか？」

「どうぞ」
椅子に座らせた。

「ありがとうございます」
顔を紅潮させて、目を輝かせた真織の様子を見て、とても好きなんだなと感じた。

真織が弾きはじめた曲に、耳を傾ける。
「これは、メンデルースゾーンの春の歌だね」
とても軽やかで、透明感のある優しい弾き方だった。
長年ピアノを続けていた感じだ。腕前もレベルの高さを感じた・・・。

「すごいじゃないか」

「これは驚いたな」
祐也も頬を紅潮させて、目が輝いてる。

「お恥ずかしいです」
弾き終ってから、小さく俯く真織。
「かなり久し振りに弾いたので、あまり上手く弾けませんでした・・・」

「えっ。これが・・・？！」
これは驚いた！！音大でも通用するぐらいの腕前じゃないか！！！

「僕の曲に参加して欲しいぐらいだよ」
祐也がにこやかな顔をして真織を見た。

「とんでもありません・・・。すみません。お仕事中に邪魔してしまって。仕事に戻ります」
慌てて去ろうとする真織。

「気にしなくて良いのに。祐也は仕事で来たんじゃないだろ？」

「ああ。邪魔しに来た」
イタズラな顔をして笑う祐也。

「あの、お昼の支度しますね。何が良いでしょうか？」

「任せるよ。君のも入れて3人前で・・・」

「え・・」一瞬驚いたが、笑顔で返事をした。
「分かりました」

真織が部屋を出てから、テーブルに置かれたコーヒーを見たら、シフォンケーキが一緒についていた。

「理、このケーキ手づくりじゃない？美味しいよ」
甘い物好きの祐也が大喜び。
「良い家政婦さん雇ったね。羨ましいよ」

「ほんとだ。美味しい・・・・」
手づくりのお菓子まで作ってしまうとは・・・。本当に素晴らしい子だ・・・。

お昼になって、ダイニングに行くと、ペペロンチーノとサラダとオニオンスープが置かれていた。

ドレッシングはやはり手づくりだ・・・。
「真織ちゃんは、料理が上手だね」
祐也がパスタを頬張って、満足そうな顔をする。
「ありがとうございます。父がシェフで母がパティシエで、家がレストランをやっていたので、両親の影響で小さい時からお料理やおかし作りが好きで・・・。」
「面接の時に聞かなかったけれど。今、ご両親は？」
理が、思い出したように聞いた。
「はい。不慮の事故で高一の時に亡くなりました」
急に曇った顔をした。
「ごめん。辛い事聞いちゃったかな？」
「いえ・・・。大丈夫です。高校はそれで辞める事になりました」
「そうだったのか・・・」
理が、それで高校を辞めたのか・・・。と心の中で呟いた。
祐也が雰囲気を変えようと、話題を変えて、
「そう言えば、ピアノ上手だね。どのぐらいやってたの？」
「6歳の時から、高一までずっと習ってました」
頬染めて楽しい思い出を思い出す様なその表情に、とても好きだったのだなと理は思った。
「かなりの腕前で、驚いたよ」

「そんな事ありません。ずっと弾いてなかったので、下手になっちゃって、お恥ずかしいです」

「今度ライブで手伝ってもらいたいな」
祐也が目を輝かせた。

「と・・・。とんでもないです。　素人がプロの方の手伝いだなんて・・・」
手を大きく横にふって、慌てた様子・・・。

「いやー。是非お願いしたいんだけど・・・」
腕を組み合わせて、顎を乗せてジッと見つめて微笑む祐也。
その姿を横目で見て、きっとファンだったら卒倒するだろうなと理は思った。
ちょっと気分悪い・・・。

「本当に、からかわないで下さい。困ります」
慌てふためいたその様子がなんか可愛らしい・・・。
「あ・・・。まだ用事がありますので・・・」
慌てて逃げ去っていった。

「あの子可愛いね」
祐也が、ほほ笑みながら、真織を目で追いかけた。

「おいおい。うちの家政婦さんに手を出すなよ」
理は、祐也のその態度に、なんだかものすごく不快な気持ちになった。
「でさ。オレ忙しいんだけど、いつまでいるつもり？」
こんな危険な奴は早々に追い払わねば・・・。

結局、真織ちゃんが夕方帰った後も、祐也は居座り続け、帰ったのは深夜・・・。
毎度の事だけどね。
いつも突然やって来て、好きなだけ居座り続け、適当な時間に帰って行く。
気まぐれなヤツだけど、大学時代からの親友で、根は純粋で、良いヤツだ。
でも、今日は何だかムシャクシャする・・・。何故だ!!
あいつが真織ちゃんに馴れ馴れしかったからか？

彼女の勤務体系は、毎週のスケジュールに合わせて週1か2の休みと言うパターンだ。
毎週休日が変動するので、家族持ちや、遊びたい盛りの若い子などは、予定が立てにくいし嫌がられる事が多いのだが、彼女の場合は文句ひとつ言わない・・・。

一ヶ月ぐらい様子を見て、キチンとした木帳面な信頼出来る子だという事が分かったので、住み込みで働いてくれないかと言う話をした。
その方が家賃もかからないし、通勤時間もかからないし、彼女の置かれている環境を考えれば、悪くない話しだと思うのだが・・・。
ただ、おばさんでは無くて、若い女性が独り身の男性の家に同居はちょっと抵抗があるかなとも思ったのだが・・・。

「どうだろうか？」

仕事柄、人の出入りの多い家で、家を建てる時には家政婦さん用の部屋と言う想定で作って貰った部屋があった。
「もし来て貰う事が出来るのなら、この部屋に住んでもらおうと思

うのだけど・・・」
その部屋は、浴室乾燥機付きユニットバス＋トイレ＋キッチン付の6畳洋間に、ベッド付の4・5畳洋間それに3畳のウォークインクローゼットと、その上が、ロフトになっている。
キッチン横には勝手口のような、ミニ玄関があって、そこから出入りが出来る。
又、小さな屋根付のウッドデッキがあるので、そこに洗濯物も干せるし、その周辺の庭に花を植えたりも出来る。

真織は目を輝かせて部屋を見回した。
「わぁ！すてきなお部屋・・・。　私の様な者が住んでも本当に良いのでしょうか？」

「もともと、家政婦さん用にと考えて作らせた部屋だから気にしなくても良いんだよ」

「ありがとうございます。あのアパート、近々取り壊しになるかも知れないと言う話しも耳にして、困っていたので、本当に嬉しいです」
その喜んだ姿に理は嬉しくなった。

ーーーーーそうやって、真織は僕の家に住む事になった。

（第3話に続く）

第3話　クビだ！！（前書き）

真織の回想シーンの家族を失う部分に、残酷な表現あります。
こう言った表現が苦手な方は、閲覧をお避け下さるか、十分ご注意下さい。

第3話　クビだ！！

真織が我が家に越して来るのに合わせて、洗濯機やテレビ、BDディスク、冷蔵庫、テーブル&椅子、ドレッサー、ベッドなど、思い付くものを一式揃えてあげた。
それから女の子の好みそうなオシャレな自転車も・・・。

それを知った真織は、とても申し訳なさそうにした。
「あの・・・。タダでこんなに頂く事は出来ませんし、折角揃えてくださったので、給料から毎月少しづつお支払いと言う形にさせて下さい」

素直には受け取ってくれない様子なので、
「じゃあ、家政婦さん用の部屋の備え付けの家具、備品と言う事に考えてくれれば気にならないかな？
ほら自転車だって、会社には社用車って物があるでしょ？　芹沢オフィスの社用自転車だと思って使ってくれれば・・・」

その苦しい言い訳に、真織は何度も嬉しそうにペコペコ頭を下げて、何とか納得してくれた。

アパートからの引っ越しの荷物は、休日に、僕が車に乗せて・・・。と言っても、本当にわずかな荷物しかなく、彼女の切り詰めた生活の様子が伺えた・・・。
とても質素な家具や自転車は、家政婦仲間さんからの要らなくなった貰い物だったらしく、あの地味な洋服も年配の家政婦さんからのいただき物だったようだ。
僕が一式揃えてあげたので、自転車と家具は処分する事になった。
僕の家に見合わない物を運び込むのは申し訳ないと言う遠慮もあっ

たようだ・・・。

彼女には僕にもかなわない、一つだけ沢山あるものがあった。
それは、本格的な製菓と料理の道具類だ・・・。
「ずいぶんあるね」

「両親の形見なんです」
そうやって微笑む彼女の顔が少し淋しげに見えた。

「そうだったんだ」

「レストランは人手に渡ってしまって、残る物はこれだけなんですが・・・。この道具を眺めてたり、使って料理やお菓子を作ると心が落ち着くんです」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

新しく住む事になる部屋に荷物を運び、片づけを手伝ってあげた。
大体片付いて、最後に彼女がチェストの上に、家族写真を飾った。
両親とお兄さんと、彼女が笑ってる優しく温かな写真だった・・・。

「これお兄さん？」

「はい」

「兄弟がいるん。」

「最近なんですが、兄も亡くなってしまって、私一人だけ生き残ったんです」

「え・・・」

「実は事故じゃなくて、私が高一の時、家に強盗が入って、両親と兄が襲われて亡くなりました」

あまりの衝撃的な話しに、言葉がでて来ない・・・。

「そんなことが・・・」

やっとの事で声を絞り出した・・・。

「こんな話しをしてしまって、驚かせてしまって、すみません」

「いいんだ。そんな辛い事があったんだ」

「私の話続けてもいいですか？」

「君が大丈夫だったら、聞かせて欲しい・・・」

そして、真織の辛い話しを聞いた。

真織の家は、店舗件住宅のログハウスのレストランで、他には2店舗経営してて、何不自由ない生活を送っていたそうだ。

蒸し暑い夏の日の深夜、お店お勝手口をこじ開けられ強盗が押し入り、両親は即死に近い状態で殺害され、兄は頭を鈍器で強打され、長年植物状態で入院していたが、ごく最近亡くなったそうだ。

ーーーーー犯人は未だに捕まっていない・・・。

真織は高校のサマーキャンプに参加していて、難を逃れたそうだ。

両親は一人っ子同士で、これといった親しい身寄りもなく、兄の入院療養費でレストランは次々と手放し、その上借金も抱え、最近まで返済に身を粉にして働いていたそうだ。

「借金の方は残ってないの？」

「つい先日最後の返済が終って、やっとこれから落ち着けるとホッとしてる所でした・・・。その上、こんな素敵な所に住まわせてもらえる事になり、ありがたくて、嬉しいです」

「お役に立てて僕も嬉しい気持ちなんだ」

「これからは、やりたい事を少しづつ叶えていきたいなと思ってるんです」

「やりたい事？」

「はい。まず、高校卒業の資格をとる事。車の運転免許に、料理の勉強もしたいし・・・。ピアノもまた弾きたいし、もっと色々あるんですよ」

目を輝かせる彼女がとても眩しく見えた。

「一つ一つ、夢を叶えていきなよ！僕も応援するし、力になるよ」

「ありがとうございます。仕事も頑張りますから！！」

「今でもとても助かってるよ」

「今日は、引っ越し手伝ってくださってありがとうございました。お礼に腕をふるってご馳走作りますね」

「疲れてるだろうし、いいよ。そうだ！　引っ越し祝いにご馳走するよ。食べに行こうよ」

「と、とんでもないです。作りますから・・・。部屋も片付いたし、これから食材を買いに、お買い物に行きますね」

「じゃあ一緒に行こう」

二人で買い物に出かけて、理は何となく新婚カップルみたいな気分に浸ってる自分に気がついた。

タダの家政婦と、家主なのに・・・。

僕は何を考えてるんだ!!

だけど、真織と出会ってから、毎日が楽しい・・・。

真織は賢い主婦になりそうだな・・・。と感じた・・・。

野菜は直売所、魚肉も、安くて新鮮なお店を色々知ってるし、しかも品物を見る目も肥えている・・・。

値段も頭に入ってる様で、今日はこれが安いとか、高いとか・・・。

若い独身女性なのに、まるっきり主婦じゃないか。その姿が愛嬌があって、笑えてくる・・・。

でも・・・。ワインを見る目は僕の方が上の様だ・・・。

「引っ越し祝いに、ワインを買って帰ろう・・・」

僕が選んだワインの値段を見て、

「それ、高すぎませんか？　私あまり飲めないので、安い料理用ので十分ですよ？」

コソコソ声で真織が耳打ちする。

「僕が飲みたいから・・・。気にしなくて大丈夫だよ!!」

真織にウインクして、ワインをレジに持っていった。

家に帰って、真織の料理の手際の良さに僕は開いた口がふさがらない・・・。
頭の中にレシピが沢山詰まってるようだ。
あっという間に次々とご馳走が並ぶ・・・。
「すごいなあ・・・」

「結局食材全部払って頂いて、すみませんでした」
「いいんだ。僕がご馳走したかったんだから、引っ越しで疲れてるのに、こんなに沢山料理させちゃって、悪かったね」
「とんでもないです。料理は大好きで、楽しいですし・・・」

テーブルにキャンドルの火を灯し、二人で乾杯する。
こうしていると、恋人同士っぽいな・・・。
家政婦と家主のはずなのに・・・。
でも、内心、僕はその域を超えた感情を抱いている自分に気がついた。
真織を見ると心が時めく・・・。
だがこの感情を表に出してはいけない気がした。
真織に気がつかれてはいけない気が・・・。
大切なものを失ってしまうかも知れない不安がしてくる・・・。

僕は細心の注意を払った。
家主と家政婦と言う一線を越えないように、だが、そっけなくもないように、優しく接して、時々冗談を言って笑わして・・・。
そんな毎日でも幸せで満たされていた。

ーーーーそんなある日、このバランスが崩れる事が起きた。
僕が仕事で家を留守にしている時に・・・。

インターホンが鳴って、玄関を開けたら祐也が現れた。
「あの、今日は芹沢さんは仕事で出かけてますが・・・」

「いや、理に用事じゃなくて、真織ちゃんに」

「え？」

「実は、近くのスタジオでレコーディング中なんだけれど、キーボード奏者が急に具合悪くしちゃって代りが見つからなくて困ってるんだ。そこで、真織ちゃんにお願い出来ないかなと思って・・・」

「と、とんでもないです。素人の私が、プロの方のお手伝いなんて絶対に無理です。それに今、仕事中ですし、芹沢さんもお留守ですし・・・」

「いや・・・腕前はこの間聞かせて貰って良く分かっているし、あれなら合格だよ。
あまり時間も無いし、理には僕から話しておくから、どうか御願い・・・」

「本当に無理ですよ！」
真織もかなり困った表情だ。

「簡単なフレーズだから、真織ちゃんの腕前なら全然ＯＫだから・・・」

緊迫した感じで、祐也もかなり困っているのが身請けられた。
真織の性格では。そんな困っている人を無視は出来ない・・・。
「あの、じゃあ今、芹沢さんに電話して聞いてもらえますか？」

「分かった。今、かけてみるよ」
電話してみたが、繋がらなかった・・・。電源を切っているようだ。
「繋がらないみたいだ・・・・。メール送っておくから・・・」

「必ず、芹沢さんにお伝えくださいね」
真織は渋々祐也とスタジオに出かけた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

夕方、仕事を終え理が家に帰って来たら、蛻けの殻だった。
真織の部屋をノックして、部屋を覗いてみたが、誰もいない・・・。
「おかしいな・・・。どういうことだ？！」

何かあったのかと心配になり、真織の携帯に連絡を入れてみるが、
全く繋がらない・・・。
着信履歴に祐也からの電話が沢山入っていた。
何だか嫌な予感がした。

祐也からメールも入ってた。
『ちょっと真織ちゃんをお借りします』
このメッセージに、頭に血が上って携帯を投げ飛ばした。
携帯は壁に当り、粉々に壊れた・・・。

「祐也！！どう言うつもりなんだ！！」

深夜2時になって、祐也の車がやって来て、真織が車から降りてき

た。
祐也の声が聞こえて来る。
「今日は本当にごめんね」
「いえ。あれでお役に立てましたでしょうか？」
「とっても助かったよ！」
楽しそうな二人の会話に、怒りは頂点に近かった．．．。
玄関の扉を勢い良く空けて、僕は飛び出した。
「こんな時間までなにやってるんだ！！」
「理、ごめん。何度も電話したんだけれど繋がらなくって．．．。
レコーディングの手伝いで真織ちゃんをお借りしたよ」
「祐也！！どういうつもりだ！！　真織ちゃんはうちの家政婦だぞ！！勝手に連れ出すなんて！！！」
今までにない理の大声に真織はかなり驚いた表情をした。
「すみません。出過ぎた事をしてしまいました」
青い顔をしながら、謝る真織。
「家を勝手に空けて、こんな無責任な事するならクビだぞ！！」
自分でも、こんな暴言を吐くなんて、そんな自分に驚いた。
「ごめんなさい、もう二度とこんな事しませんから、許してください」
泣きながら謝る真織。
「全てオレが悪いんだ。キチンと確認しないで真織ちゃんを連れ出

して・・・。本当に悪かった」
今まで見た事がない僕の怒った様子に、祐也もかなり驚いた様子だ。
その時、この険悪な雰囲気が一転する事が・・・。
真っ青な顔をしていた真織が、急に苦しみだして、その場にしゃがみ込んだ。
「あ・・・」
「え？」
僕と祐也は慌てふためく。
（4話に続く）

第４話　マドレーヌのストラップ

真織は呼吸を荒くして、しゃがみ込んだあと、息が出来ない様子で、真っ青に苦しそうにした後倒れた。

「真織ちゃん・・・。だ・大丈夫！！」

祐也はパニクってる。

「過呼吸だ！！」

理は真織を抱きかかえると、家に上がり、ソファーに寝かせた。

暫く苦しそうにしていたが、やがて息苦しさもとれてきて、落ち着いてきた。

「大きな声を出して、ごめん」

理は真織に謝った。

「私こそ、すみません。　施設で辛い目にあって、不安な気持ちになると時々パニックになってしまうんです」

想像以上に辛い目にあってきたんだな・・・。

「ほんとうにごめん。さっき言ったのは口から出任せで本心じゃないんだ」

「僕も悪かったよ。無責任すぎた。理、真織ちゃん、本当にごめん」

僕は祐也に嫉妬して、理生を失っていたのかも知れない・・・。

祐也は親友だし、悪気は全くなかった事だって分かってる・・・。

子供だったな・・・。もっと器の大きな人間にならなくては・・・。

僕は深く反省した。

可愛そうな真織・・・。
もっと優しく守ってあげなくちゃ・・・。彼女の心の傷を癒してあげて、辛い記憶を忘れさせる事が出来るように。
僕はもっと広い心を持って、器の大きい人間にならなくては・・・。
それが僕の真織への愛情だ・・・。
理は心の中でそう呟いた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

仕事も一段落したし、今日は1日オフの日。
真織にも今日は休日を与えた。

久し振りに、スポーツサイクルに乗って、図書館に出かけた。
ずらりと並ぶ本棚の本を物色していて、ふと前方に立っている人を見たら真織だった。

「あれ？　真織ちゃん」

「あ・・・。芹沢さん」
ニッコリ笑って手を振る。

「何の本を捜しているの？」

「料理関係の本と、高校レベルの参考書を・・・。高校卒業認定試験を受けようと思ってるので・・・。それから、運転免許もとろうと思って・・・」

「すごいね」

「いえ・・・。とんでもないです。高校認定が合格したら、製菓学校に通おうかなとも考えてるんです」
頬を染めながら、キラキラした目で夢を語るその姿が可愛いなと思った。

「将来は、そっちの方向に進みたいの？」

「夢で終ってしまうかも知れませんが、カフェをやってみたいなって思ってるんです。手作りのケーキを販売もして・・・。 バリスタや紅茶コーディネーター、ハーブティも学びたいし・・・。 あは・・・ 欲張りですね」

「いや・・・ きっと夢が叶うよ。素晴らしい夢だね！！応援するよ！！」

「ありがとうございます。そう言って頂けると心強いです。頑張ります」

「もし、そう言う関係の勉強をしたいのなら、勤務時間や休暇とかは融通出来るから、遠慮なく言ってね」

「ありがとうございます。凄く嬉しいです！！」
目を輝かせて物凄くはしゃいだ様子で、その姿を見たら僕も嬉しくなった。

「沢山借りちゃいました」

「すごいね。これからの予定は？」

「とりあえずこの本を家に置きに帰って、あとは未定です」

「良かったら、どこか出掛けない？」

「え？　」

ちょっと驚いた様子で、理はやばい事言ってしまったかなとドギマギした。

「その、嫌じゃなかったら・・・。」

僕は鼻の頭を指で掻いて、照れながら言った。

「そんな嫌じゃありません。いいんですか？」

パーッと嬉しそうな表情に、理はホッと胸をなでおろした。

そして「ラッキー！」と思った。

「何処か遊びに行きたい場所とかある？」

「あの・・・」

ちょっと遠慮がちに照れながら、

「製菓の道具とか材料とか見に行きたいなと思って・・・。ちょっとつまらない場所ですよね？」

「いいよ・・・遠慮しないで！　知らない所に行くのって結構楽しいし、新鮮な新しい発見もあるしね・・・。」

そうして一緒に車で合羽橋道具街にやって来た。

ここはプロ用の製菓や料理の道具や食材・・・ラッピング用品等々色々な品が揃う。

「へえ。こんな大きな鍋があるんだー」

結構はしゃいでる自分に気がつく。
やっぱり真織と一緒だからだろうな・・・。
「芹沢さんは甘いもの好きですか？」
「結構食べるよ」
「じゃあ、今度焼き菓子作りますね」
そう言って真織は、焼型を数点レジに持っていった。
「これは、マドレーヌの型で、シェル（貝殻）の形をしてるんです。他にも色々な形がありますが・・・。こっちは、フィナンシェで、何かの形に似てませんか？」
「え？何だろう？」
「答えは、金の延べ棒の形です。インゴット型とも言うんですが・・・」
「あ、本当だ！！」
「フィナンシェは”お金持ち”と言う意味の言葉で、焦がしバターをたっぷり使ったお菓子で、その風味がすごく良いお菓子なんです」
「色々作って貰えるのが楽しみだな」
お店で僕も色々見て回っている間に、真織の姿が見えなくなり、また暫くしたら戻って来た。
忙しい子だ・・・。クスッと笑ってしまった。
帰り道、車に乗り込んでから真織が小さな包みを僕に渡した。

「芹沢さん、これどうぞ食べてください」

僕が包みを空けたら、シェル（貝殻）の形をしたマドレーヌが出てきた。

「キーホルダー？」

「なんちゃって・・・。食品サンプルのお店で売ってるんですけど、今日付き合って下さったお礼の気持ちです。良かったら使って下さい」

ニッコリ笑う真織が眩しく素敵だった。

「どうもありがとう。凄く嬉しいよ」

僕は新しく変えた携帯に、マドレーヌのキーホルダーを付けた。

「気に入って頂けて、嬉しいです」

僕の宝物にするよ！！と心の中で呟いた。

（第５話に続く）

第5話　楽しい?!ドライブ

「じゃあ、行ってまいります」

「ああ、頑張ってね！」

真織は、教習所に通い始めた。
頑張り屋の真織、学科の方は熱心に一生懸命勉強してパーフェクトをとったようだけど、実技の方はそうもいかないようだ。
時々、椅子に座って、鍋の蓋をハンドル代わりに、運転の練習をしている様子も見かけた。

「ただいま、戻りました」

「お帰り。どうだった？」

「やっと、終了印がもらえました。次はいよいよ仮免です」
はぁ。と大きくため息をつく。

「ため息なんてついてどうしたんだい？」

「やっと仮免って感じで・・・　結構時間がかかるなぁって・・・　ついため息が出ちゃいました。
学科の方は頭の中に詰め込んでおけば何とかなりますが、実技の方は頭で考えている様には上手く行かなくて・・・　難しいですね」
そう言いながらまたひとつため息を漏らした。

「でも、そんなに実技時間オーバーしてないし、進行が早いよ。

なかなか運転の素質あるかも・・・」

「早く路上に出れるように頑張りますね！！　音楽を聴きながらドライブが憧れなんです」
そう言って目を輝かせた。

「よし。じゃあ、免許とったら河口湖に行こうよ」

「えっ？　河口湖にですか？」

「ああ。そこに別荘があるんだ・・・」

「わあ。素敵ですね！　芹沢さんはカッコいいなぁ～」

「え？　」

「だって有名な音楽家で、車も別荘も沢山持ってるし、頭が良くて背が高くてイケメンで・・・優しいし・・・」
そう言って、屈託のない笑顔で笑いかけられて理はドキッとした。

「そ・そんな事ないよ！」
そんな風に見ててくれたんだ・・・。結構好感度高いのだろうか？
で、真織の中では、僕はどの位置付けなんだろう・・・。
恋愛対象には・・・。入ってなさそうな予感がする・・・。（泣）

「本当ですよ！　芹沢さん女性にモテそう・・・」

アッサリとそう言う言葉が口から出るって事は、恋愛対象には入ってなさそうだ・・・。ちょっと落ち込む。
「そうでもないよ・・・。何とも思ってない女性には好かれて、好

きな女性からは見向きもされないんだよな」

「見向きもしない女性が存在する事が信じられません。きっと目が悪いんですよ」

うーん。その言葉微妙なニュアンスだな・・・。

「そうかなー」

「うんうん。きっと！」

そう言う事をサラッという真織は・・・。僕の事をどう思ってるんだ。凄く気になるよ・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

理はＲ２４６を三軒茶屋から六本木に走行中、交差点で信号に引っ掛かった。

対向車線を見たら、教習車が止まってる。

「真織だ・・・。頑張ってるじゃん」

お互いに手を振って、ニッコリ笑いあう。

真織の車の教官が気付いた。

「知りあい？」

「はい」

「凄いね。ＢＭのロードスターだ・・・」

「あの方は、作曲家の芹沢さんですよ」

「ええっ。知り合いなの？」

「はい・・・ちょっと・・・」

真織は鼻高々だった・・・。

芹沢さんは本当にカッコいいし、素敵だし、優しいし、女の子の憧れだな・・・。

またまた信号にひっかかって、対向車の車から大きく手を振る人が・・・・。

「あ・・・。西宮さんだ・・・」

教官がまた驚きの声を上げた。

「あれは、イリュージョンの西宮祐也？！」

「はい」

「彼とも知り合いなの？」

「あ・・・はい」

「凄い！！今度は、ポルシェだ！！」

真織はとても嬉しかった。

少し前まで、孤独で独りぼっちで淋しい日々だったのに・・・。

手を降り合って笑い合う知り合いが2人もいる事に・・・。

その二人が、みんなが憧れる、とても素敵な方達・・・。

幸せな気持ちでいっぱいだった。

卒業検定も無事クリアし、真織は運転免許センターで学科試験を受けに来ていた。

仕事が片付いたので、芹沢も一緒について来た。
試験も終り、電光掲示板に合格者の番号が現れるのを、今か今かと待合室の椅子に座って二人で待っている所だ。
「すみません。免許センターまでついて来てくださって・・・」
「そんなの気にしないで。早く免許証が出来上がるのが見たいよ」
「大丈夫だと思いますが・・・。これで落ちたら付いてきて下さった芹沢さんに申し訳ないし、ショックだし、恥ずかしすぎます」
いつになく自信なさげに身を小さくして椅子に腰かける真織。
「絶対大丈夫だよ!!」
「ああ・・・。ドキドキしてきます」
真織は、膝をトントン動かして落ち着きがない。
「大丈夫!!」
芹沢は、とっさに真織の手をそっと掴んで握りしめた。
「はい・・・」
真織は嬉しいのと恥ずかしいのと・・・。心臓はトクントクン早く鼓動しはじめた。
『芹沢さんの手って温かくて大きいな・・・』
その時電光掲示板の合格者番号がパッとついた。
「真織ちゃん何番?」

「７９４番です。泣くよ（７９４）で縁起悪い番号ですー」
「・・・・」
２人で緊張の面持ちで掲示板を凝視する。
「あったー」
二人で手を取り合って飛び上がって喜んだ。
そして、出来上がった免許証は・・・・。
「うわぁ。人相悪くてすごく変です・・・ショックだなぁ・・・」
「わあ。本当だ、真織ちゃんじゃないみたい・・・」
「はぁ・・・免許更新日まで、この写真だなんて・・・」
「でもさ、写真が良すぎて実物が酷いのより全然良くない？」
あ・・・今の全然フォローになってなかったかな？
「気にしない　気にしない！！」
「はい」
帰り道、運転してもらおうかな？とふと思いついた。
「早速運転してみる？」
「絶対無理です！！嫌ですよー。芹沢さんの素敵な車が一瞬で廃車になっちゃいますよ」
「あはは・・・それは困るな。よし！！今度一緒にドライブに行こう。その時は運転頼むよ」

「近場なら・・・」

「いや。遠くに行こう」

「無理無理・・・」

苦笑して、慌ててて手を左右にふって一生懸命拒否る。

「いや行くぞ！！　そうだ、河口湖に行く約束だったよね？行こう・・・行こう」

「それ無理です。高速乗れない。（泣）」

帰りは大盛り上がり・・・。

そして本当に、河口湖にドライブに行く事に・・・・。

「なんだ。運転してくれないの？」

理は、意地悪そうな笑みを浮かべた。

「初心者マークの人が、いきなりこんな大きな外車のＲＶ車、運転できる訳ありませんよ」

真織が口をとがらせて、冷や汗たらしながら言った。

「じゃあ、向こうに着いて、人のいない広い道になったら運転してみてね」

「それなら、少しだけ・・・」

「約束だよ」

「は・・・い」

凄く自信なげに返事をした。
ふと、彼女が運転しやすそうな車が居るなと思った。
大きな外車のＲＶ車に乗って、高速に乗り、二人は河口湖に向った。
理は真織のじっと見る視線を感じた。
「なあに？」
「あ．．．。芹沢さんの運転する姿、素敵だなと思って．．．」
「えっ」
その一言にドッキリした。
「運転も滑らかで上手ですよね。私は絶対に無理そう．．．」
「慣れだよ慣れ。恐がらないで練習すれば、乗れるようになるよ」
「せっかく免許がとれたけど．．．。自信が無いです」
「大丈夫！！あきらめないで」
「はい。芹沢さんの大丈夫は魔法なんです」
「え？」
「勇気の無い意気地無しの私を元気づけてくれて、いつも勇気を貰ってるんです」
真織が頬を染めて言った。

「本当？じゃあこれからもいっぱい言うよ。大丈夫！！真織ファイト！！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

河口湖の別荘は、木をふんだんに使った北欧スタイルの家だった。
広いウッドデッキには木のブランコや、バーベキューグリルに大きな木のテーブルと長イスがついていた。

「わあ、素敵ですね・・・」

「ここから湖上祭の花火大会も見れるし、なかなか良い環境だよ」

「星がとても綺麗・・・」
目をキラキラ輝かせて、星空を見上げる真織の横顔が可愛いなと、理は思った。

ウッドデッキには、木のスリーピングチェアーが並んでいた。
「ここに寝そべって、夜星を見ると綺麗なんだよ」
そう言って、理がごろんと椅子に寝ころんだ。
「やってみなよ」

真織もごろんと寝てみた。
「わぁ。本当に星がすごい・・・」

「ここで、満天の星を見ていると、何時間でも飽きないんだ」

「こんなに沢山の綺麗な星・・・。初めて見ました」

無言で二人で暫くの間星を眺めていた。

暫く見ていたら、夜風がだんだん冷たく感じて来て、体が冷えてきた。
「うわっ。だんだん寒くなってきたね？　家に入ろう」
そう言って、真織を見たら眠ってた。

「全く・・・。風邪ひくよ」
ピクリとも動かず、熟睡していた。
かわいい寝顔に、理はとても愛おしくなって、そっと頬にキスをした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

朝起きたら、ベッドの中にいた。
「あれ？」
真織は昨日の事を思いかえしていた。
「いっけない。あのまま寝ちゃったんだ！！」
思いかえすと青くなってくる・・・。
「ここまで芹沢さんが運んで来てくれたんだ。恥ずかしい・・・」
両手を頬に当てて、赤面してしまった。
どんな顔で寝ちゃったんだろうか？きっと凄く重かっただろうな・・・。

そっと部屋の扉を開けたら、家の中はシーンと静まり返ってる。
時間は朝の６時半・・・。
芹沢さんまだ寝てるのかな？

キッチンに行って、朝ご飯の支度をする。
昨日、近所のおいしいパン屋さんで、買ったパンを温め直して、籐のバスケットにナプキンを敷いて並べた。

サラダとカリカリベーコン&エッグ、コーンスープを作って準備万端・・・。

芹沢さんいつ起きて来るのかな？

ちょっと家周辺を散歩してみようかな？

玄関の扉を開けて、外に出てみた。

湖はキラキラ光って、水蒸気が上がり、辺り一面もやがかかってとても幻想的な風景だ。

「きれいだな・・・・」

ウッドデッキの柵に寄りかかり顎をのせて、その美しい景色をずっと眺めていた。

「おはよう・・・。早いね」

後ろから、理のまだ眠そうな声がした。

「昨日はすみませんでした」

くるっと振り返り、慌ててペコリと頭を下げてから、理を見上げたら・・・・。

髪の毛がすごく跳ねてる・・・。

つい「ぷふっ」と笑ってしまった。

「なになに？」

凄く慌てふためく理。

「髪の毛が凄く跳ねてますよ」

「あちゃ」
頭に手を当てて、凄く焦った様子だ。
「不思議ですね・・・」
「ん？」
「いつも三軒茶屋の家で一緒に住んでいるのに、今日は芹沢さんがいつもと違って見えます」
「え？」
「いつもピシッと決まってるから・・・今日は無防備な感じで・・・。すみません。何か可愛らしい感じに見えます」
「それって良い事なのか、悪い事なのか・・・」
苦笑しながら照れる。
「決まってる芹沢さんも恰好良くて素敵ですが、今日の芹沢さんもとても親近感が湧きます」
「ええっ。そうかな？」
照れまくる理。
「昨日の爆睡した真織ちゃんも、無防備で親近感湧いたよ」
「きゃあ！思い出しました・・・。恥ずかしすぎます」
頬に手を当てて、真っ赤なトマトのような顔になった。
「ヨダレたらしてた」

「えーっ！！」
こんどは目をクリクリさせて、青くなった。
「嘘だよ。でも、これでお互い醜態をさらしたからおあいこだね」
「はあ・・・」
真っ赤に照れまくる真織。
朝食の後、家の前の道路で、真織は理のＲＶ車を運転した。
「うわぁ。車幅感覚が良く分かりません」
「大丈夫、大丈夫・・・。ちゃんと走ってるよ」
「うわぁ。手に脂汗が・・・」
「真織ちゃん、口が開きっ放しだよ」
そう言われて、真織は今度は口を真一文字にして、必死で運転・・・。
まるで百面相だな・・・。
理が真織の顔を見て、可笑しくなった。
「ひゃあ、とても緊張しました」
家の前に車を止めて、真織が運転席から降りた。
「なかなか上手かったよ。これなら大丈夫！！」

笑顔で理が助手席から降りた。

「あれ？」

見慣れない外車が家の前に止まっていて、理が不思議に思った。

その時・・・。

「おさむ　久し振り　会いたかったわ」

ウッドデッキの椅子に座って待っていた様子の女性が、理に飛びついて抱きついた。

緩いウェーブのかかった栗色のロングヘアーに、色白でばら色の頬の目のパッチリした、とても美しい女性だった。

バラのレーシーなチュニックワンピースがとてもエレガントで垢抜けてて素敵だ・・・。

「優璃愛（ゆりあ）何だってここに？」

理は動転した様子。

優璃愛は上から下まで品定めするように真織を見た。

「この地味な子はだれ？」

不満そうに目を釣り上げて、理に言った。

（第６話に続く）

第6話　理は私のもの

いきなり理に抱きついた、天真爛漫な妖精の様な、優璃愛と言うこの女性は一体？
真織は呆気にとられて固まっていた。

「優璃愛、いきなりなんだよ！なにしに来たんだよ」

「あら、迷惑だった？！
ここに（河口湖）の別荘に来てるって耳にしたから、わざわざ顔出しに来てあげたのに・・・」

「誰も、呼んじゃいないだろ」

「冷たいじゃない。ところでこの子はだれよ？」

「あ・・・。初めまして・・・。芹沢さんのお宅で家政婦をしてます、七瀬真織と申します」
慌てて挨拶をする。

「家政婦なの？　雇われ家政婦のくせに、理に妙に馴れ馴れしいじゃない・・・。こんな所まで一緒にくっついてきて・・・」
目を吊り上げて、睨みつけてきた。

「なんだよその言い方は・・・。くせにって・・・」
理が迷惑そうな顔をした。

「そうじゃない。私という彼女がいながら・・・。そんな野暮な子と仲良くするなんて・・・」

今にも泣きそうな顔で、悔しそうに真織をきっと睨みつけた。
『恋人？』
芹沢さんの彼女なの？！
真織は心がズキンとするのを感じた・・・。
「おいおい・・・。いつから恋人になったんだよ。よしてくれよ」
「私は理の事が好きなの！！　一緒にデートだってした仲じゃない！！」
『デート？！』
真織は頭の中が真っ白になって来た・・・。
「とにかく、これから用事があるし、今日は帰ってくれないか」
理は冷たくあしらった。
「冷たすぎるじゃない！！家にもあげてくれない訳？！」
「用事があるんだよ。支度して、これから出かけるんだ」
苛立った様子で、理は真織の手を掴んで「行こう」と家の中に入った。
「おさむー。お父様に言い付けてやるから！！」
優璃愛はヒステリックに悔しがった。
玄関の扉を閉めて、理はカーテン越しに優璃愛の様子を見て、
「ふーっ。とんでもないのが押しかけてきて、参った！！」
それから真織を見て、
「真織ちゃんごめん。嫌な気持ちにさせてしまったね」

真織は「ううん」と首を横に振った。

「あの子は、僕の世話になっているレコード会社の代表の娘で、大学の後輩でもあるし、歌手でもあるから曲も書いた事があるし、そう言う関係なんだ。別に恋人じゃないから」

理は、焦った様子で説明した。

「一度代表に頼まれて、一緒に出かけた事はあるけどね、ああいう性格の子だから、凄く苦痛な時間だったよ。僕はああいう子は苦手だな。僕は君みたいな・・・」

と言いかけて、理はハッとした。

真織は心が高鳴った。

どんな顔をしていいのか分からず、目をそらして顔を赤らめた。

「そ、そうだ、家にいるとまた彼女が押しかけてきそうだし、ドライブに行こうよ」

「あ、はい」

真織は、今、理が言った事を、頭の中で整理していた。

『芹沢さんがさっき言った事は、好みのタイプの話しで、私が好きって言う事じゃないわよね・・・うん、そうよね。私の事好きだなんて！自惚れちゃダメだわ。地味目の人が好みって言う事よね・・・』

そう自分に言い聞かせて、「よし！！」と自分に気合いを入れた。

「え？何か言った？」

「あ・・・。いいえ何も言ってません」

理は、真織の様子を伺って、あれこれ考えていた。
『ついうっかり、告白っぽい事言っちゃったけれど、あまり動揺してない感じだな？嫌われてはいないと思うけど、恋愛対象的に好かれてる訳でもない感じだな・・・』
ちょっとガッカリした気分だった。
『でも、嫌われてないから、望みはある！！　時間をかけて、彼女のハートをガッチリ射止めるぞ！！』
そう自分に言い聞かせて「よし！」と呟いた。

「え？何かおっしゃいましたか？」
真織が聞いた。

「いや。なにも・・・・」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

真織は河口湖から帰ってきてから、中古の軽自動車を買った。
年数はまあまあ、走行距離も程々、修復歴なし、値段２６万円、色はパールホワイト・・・。
「うん。中々のお買い得品だったわね」
自分に呟いた。

理が買ってあげると何度も言ってきたのだが、頂く理由もないし、そこまで甘えるのは嫌だったし、毎月頂いてる給料もかなり高額で、自分の力で購入したかった。

「へぇ、国産の軽もこうやって見ると、なかなか可愛いね」

「そうですか？　飲みに行って迎えが必要な時には遠慮なく言ってくださいね。お迎えに伺いますので・・・」

「それは嬉しい・・・。じゃ今度頼むね」

「はい」
真織はニッコリ笑った。
「ちょっと試乗してきます」

「じゃあ乗せてよ」

「運転荒いかも知れませんが・・・」

「いいよ」

芹沢の車に乗せてもらう時には、外車で車幅も大きいので、並んで座ってもゆとりある感じだが、軽だとお互いの距離も近い感じだ。
「なんか軽だと狭いですね」

「本当だ・・・。お互いの距離が近くて、いつもと雰囲気が違うね」

「出発しまーす」
真織が左右確認して、ウインカーを出し、ギアをドライブに入れて発進した。

初めは緊張してぎこちない様子だったが、慣れてくると運転が楽しい様子だ。
そのうち「首都高に乗ってみまーす!!」と言って、首都高口に入って行った。
合流も滑らかで、進路変更もなかなか・・・。
そして、レインボーブリッジを通って台場埠頭までやってきた。

夜景を見ながら・・・。
「調子に乗ってこんな所まできちゃいました・・・」
「運転上手いじゃない。これならどこにでも行けるよ」
「芹沢さんのお陰で、運転免許も取れて、車も持つ事が出来て、ドライブに行く余裕も出来て・・・。最近毎日が楽しくて、とても嬉しいんです」
キラキラと目を輝かせ、笑顔の真織・・・。
顔には、七色に変化し輝くパレットタウンの大観覧車の光が映っていた。
「真織ちゃんが幸せだと、僕も嬉しいよ」
「いつも優しくて、親切で、芹沢さんがいつも守って下さって、私、感謝し切れないぐらいの気持ちなんです。本当にありがとうございます」
「そんな気にしないでよ。僕が好きでやってる事なんだから・・・。大した事してないし・・・」
「そんなことありません。沢山の幸せを頂きました」
「そう言ってもらえて、僕も嬉しくて幸せだよ」
お互い優しい笑顔で見つめ合い、それから二人並んで台場の夜景をずっと見ていた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「じゃあいってくるね」
今日は仕事の打ち合わせで、理が六本木のスタジオに出かけるところだった。

「いってらっしゃい」
お互いにニッコリと手を降り合い、端から見たら新婚夫婦のような二人・・・。
恋愛に疎い二人ならではと言うか、好き者同士ひとつ屋根の下で暮らしているけれど、理と真織は仲が良いにも関わらず、一線を引き、清く正しく美しく、家政婦と家主と言う関係を続け、日々の生活を送っていた。

ーーーーだが・・・。
理の事が大好きな優璃愛にしてみたら、腸は煮えたぎり、嫉妬の炎がメラメラと燃え上がっていた。
嫉妬に狂った人間は、何をするか分からないものである。

買い物に出掛けようと車の扉に手をかけて、真織は車の異変に気がついた。
「あら？」
タイヤ４本の空気が抜けてるのだ。
「どういうこと？」
原因が分からないままＪＡＦに電話して、修理工場まで持って行ってもらった。

「お客さん、これはイタズラですよ。警察に連絡したほうがいいですよ」
修理工場の整備士が腕組みしてタイヤを見つめてた。

「そうなんですか・・・。こんなイタズラをされるなんて、凄くシ

ョックです」
「騒ぎになって、お世話になっている家主さんに、ご迷惑がかかると困るので、今回は、内々に処理しようかと思います」
「そうなんですか？　こういうイタズラって繰り返される事が多いし、やり口が陰湿ですし、お気をつけになったほうが良いと思いますよ」
「はい。また同じような事があったら、警察に相談してみます」
「じゃあ修理終りましたら連絡しますね」
「よろしくお願いします」
真織は凄くショックだった。
私を狙ってやったのか？それとも無差別に通りすがりのいたずらなのだろうか・・・。
悶々とした気持ちで、家に戻り、車を預けたので、自転車で買い物に出かける事にした。
自転車で商店街に向ってこいでいたら、急発進してかすめるように車が真横を通っていった。
『恐い・・・。』
恐怖心が押し寄せてきて、今までずっと忘れてた不安感が襲ってきた。
その途端、胸が苦しくなって、呼吸が出来ない感覚に襲われた。
いくら吸っても、息が苦しい・・・。
パニック症状を起こして、その場で倒れ込んだ。

目覚めたら病院のベッドの中だった・・・。
「あ・・・」
「真織ちゃん、大丈夫？」
理が心配そうに覗き込む。
「すみません。ご迷惑おかけしちゃいました」
「何があったの？」
真織は正直に今まであった事を話した。
「ご迷惑がかかるかと思って、警察には連絡しなかったのですが、恐ろしくなってしまって・・・」
「そんな事気にしないで、すぐ連絡すれば良かったのに・・・。防犯ビデオがついてるから、僕が警察に連絡しておくよ」
「いつもご迷惑ばかりかけてしまって、すみません」
「そんな事全く気にしなくて良いから。僕がついてるから大丈夫！！」
警察に届けた防犯ビデオには、見た事のないチンピラ風の男が映っていた。
全く心当たりがないので、通りすがりの無差別な愉快犯だろうと言う事だった。
パニック症状は、パンク事件の不安感から、自転車の横を通過した運転の荒い車に対して、不安感を抱いたのでは？と言う事だった。
最近発作も全く起こさず、満たされた気持ちで毎日を送っていたの

に・・・。
真織もまた辛い過去に引き戻されるのは嫌だと思った。
気にしないようにしよう・・・。
つまらない事にこだわってたって、良い事はない。
芹沢さんにも迷惑がかかる・・・。

あれこれ考えている自分から、ハッと我に返り、カレンダーを見たら『２５』と言う数字が目に入った。
「明日は２５日・・・」

理の仕事部屋の扉をノックした。
「芹沢さん、ちょっと良いですか？」

「どうぞ、入って」
中から理の声がする。

ドアを開けたら、ピアノの上には沢山の楽譜が散乱し、忙しそうな理の姿が見えた。

「お忙しい所すみません。突然ですみませんが、明日昼頃から夕方までお休みとらせてもらっても良いですか？」

今までそんな事言った事が無かったので、少し驚いた表情をして、
「休みをとりたいなんて珍しいね。何かあったの？」

「色々あったので、大切な事をすっかり忘れていたのですけど、明日は両親の命日なんです。お墓参りに行こうと思って・・・」

「そうだったのか・・・。休みの事は大丈夫だから、行って来て」

「ありがとうございます」

「あの・・・。僕も君のご両親に会いに行っても良いかな？」

「え？！」

「もし迷惑じゃなかったら・・・。ご挨拶したいなと思って」

「両親と兄が喜んでくれると思います」

真織が嬉しそうに微笑んだ。

真織と理は、真織の両親と兄が眠るお墓の前に立っていた。

「お父さん、お母さん、お兄ちゃん、今日はお世話になっている芹沢さんと一緒に来たよ。芹沢さんはいつも私を支えてくださって、沢山助けて頂いてるの。真織は淋しくないし、今は幸せだから安心してね。それから・・・」

そして真織は心の中でつぶやいた。

『実は、芹沢さんの事、大好きです。素敵な人でしょう？』

理が、手を合わせて、

「初めまして、芹沢です。　真織さんはいつも一生懸命やってくれて、かなり助けてもらってます。真織さんの事、ずっと支えて力になるつもりです、安心してくださいね。それから・・・」

心の中でつぶやいた。

『この先、プロポーズして、もし真織さんがＯＫしてくれたら、お嬢さんを僕に下さい。よろしくお願いします』

お墓参りの帰り道・・・。

「芹沢さん、今日は一緒に来てくださってありがとうございました」

「僕の方こそ、連れてきてくれてありがとう。是非ご挨拶したいなって思ってたんだ」

「え？」

理は真織の手をそっと取り、繋いで歩いた。
真織は頬を染めて、理の顔を見上げた。

この二人の様子を、木陰からそっと見る者がいた。
冷酷で憎悪に満ちた目を光らせて・・・。
優璃愛だ・・・。

翌日、車に乗ろうと思って見たら、横一文字に傷が入っていた。
「タイヤは？」
タイヤも前輪2本またパンクしている。
自転車を見たら、自転車のタイヤも空気が抜けていた・・・。
「どうしてこんな事するの？」
呆然として立ち尽くしていたら、携帯の電話が鳴った。
「えっ」

両親と兄の眠る墓にペンキがぶちまけられていて、供えた花がグチャグチャに荒らされていたとの連絡だった・・・。

「何でこんな事するの？　一体誰？！」

今回は、理からすぐに警察に届けるように言われていたので、警察に連絡し、防犯カメラのビデオを提出した。
霊園の方も、防犯カメラがあちこち設置されていて、その画像データを提出・・・。

そして、車や自転車のイタズラは、やはりチンピラ風の例の男だったが、霊園の方のイタズラには怪しい女性が浮映っており、理と真織が確認したところ知っている人物が浮上し、驚愕した。
「優璃愛さん？」
「優璃愛！！」

「まさかここまでするとは・・・」
理はあきれ果てた。

防犯ビデオに最初に映っていたチンピラ風の男は、優璃愛がやとった男だったのだ。
優璃愛の父親が何とか穏便に、温情をと、謝罪しに来て、お墓は元通り綺麗にされ、真織は要らないと何度も言ったのだが、それでは気が済まないと新車の高級車が届いた。
自転車も新しいのをと何度も言われたのだが、理が買ってくれた自転車だったので、それは絶対にのめないと固く断り、タイヤ交換だけにして貰った。
そして、法外な慰謝料が振り込まれてきた。
そして、優璃愛の父親は、娘の事で世間を騒がせた会社代表を辞任した。

理と真織は、また両親のお墓に行って、新しく花を添えた。

二人で霊園の大きな木の下のベンチに腰かけ、綺麗に整備された花壇の前の噴水をボーッと見てた。

「今回の事、とてもショックでした。想像してないような事で、いつ人から嫌われ憎まれるか分からないなって・・・。人から嫌われて憎まれるのって辛いし、悲しいです」

「僕の責任もあるよ。本当に悪かった。ごめん」
「芹沢さんは関係ありませんよ。芹沢さんのせいじゃありませんから・・・」
「僕と関わらなかったら、巻き込まれる事はなかったんだし」
「私、芹沢さんと出会えて幸せで嬉しいんです。関わる事が出来て、本当に良かったなって思ってますから・・・」
「本当？」
「はい」
「あのさ。この間、君のご両親に、君が許可してくれたら、お嬢さんを僕に下さいって言ったんだ」
「えっ？」
「真織さんの事、好きなんだけど。僕とつきあって貰えないかな？」
「・・・・・」
真織は目を真ん丸にして、手を口に当てて、驚きの表情のまま固まってしまった。
「あの・・・。嫌かな？」
「嬉しいです」
それから真織は頬を染めて、恥ずかしげに目を伏せた。
「この間、両親と兄に、芹沢さんが大好きですって言いました」

「本当?！」
嬉しさのあまり、声が上ずる。
「でも、天涯孤独で、貧乏で、中卒の何も取り柄のない私で本当にいいのかなって・・・・」
「そんな事全く関係ないよ。君の全てが好きだから。つきあって欲しいんだ。いずれ結婚して欲しいって思ってる」
「嬉しいです」
「これから真織って呼んでいい？」
「はい」
「じゃあ僕の事、名前で呼んでよ」
「なんか照れますね・・・。じゃあ、言いますね」
真織は胸に手を当てて、一度深い呼吸をしてから声を震わせ含羞みながら言った。
「理さん・・・」
笑顔で見つめあって、優しくそっと唇を重ね合った。
ーーーーそんな二人の姿を影からカメラで盗撮する者が・・・・。
（6話に続く）

第6話　理は私のもの（後書き）

なんか一昔前のドラマのような雰囲気・・・。（^＿^；）
未熟ですみません。初めて書いた思い出の作品ですので・・・。

でも・・・純愛ストーリー好きです！

第7話　家政婦やめます！

ついにお互いの気持ちが通じあい、恋人同士の関係になった二人・・・。

恋人同士となると、家政婦と雇い主の関係を続けるのは難しくなる。

恋人同士がひとつ屋根の下で暮らせば、一般的な目で見れば同性する二人・・・。

家政婦として給料を貰うのは、当然だが、恋人関係となれば、見た目によっては愛人関係にも映る・・・。

すぐ結婚すれば、その問題も難なくクリアするけど、真織は若いし、まだやりたい事が沢山あった・・・。

理の方は、結婚適齢期・・・。

本心を言えば、明日にも婚姻届を出したい気持ちだが・・・。

真織の事を思いやり、とりあえず、結婚するまでは清い関係を続けようと決めた理であったが・・・。

嵐はすぐにやって来た！

突然記者が押しかけ、ワイドショーのレポーターまで押し寄せてきた。

芸能スポーツ三流雑誌『週刊　パパリッチ』に、理と真織が霊園のベンチでキスした写真が大きく載せられ、『有名作曲家　芹沢　理の恋人は、家政婦！！ひとつ屋根の下で暮らす熱い二人・・・』衝撃なタイトルが載せられてる。

更にサブタイトルに『家政婦は養護施設出の孤児。学歴中卒の女。あの、レストランオーナー強盗殺人事件の遺児』と書かれている。

「家政婦のあるまじき行為」とか、「人の弱みにつけ込んで、金で

愛人関係を強要するふしだらな音楽家」とか、「純真な音楽家の心を虜にする魔女の様な家政婦」とか、批判の電話もジャンジャンかかって来た。

人はどうしてでっち上げた嘘の情報に惑わされ、勝手に正論者ぶって刺々しい批判の牙を向けるのだろうか？
何て愚かな人間がこの世の中には多いのだろうか・・・。

「こんな事になって、迷惑掛けてしまって、ごめん」

「私こそ、ご迷惑をおかけしてしまって、すみません」

「僕がどんな事をしても、絶対に守ってあげるから」

「私の事は心配しなくて大丈夫です。人の噂なんて気にしませんから・・・。でも、このままでは理さんの仕事に大きな支障を来す恐れが・・・」
現に、お固い企業関係会社は、理の作ったコマーシャルソングを使用しなくなったり、公営放送の歌番組では、理作曲の曲を歌わせなかったり、そういった動きが出始めていた。

「1番の問題は、私がここで家政婦をやっている事だと思うのです。だから、家政婦を辞めようと思います」

「え？」

「ここも出ていこうと思います」
固い決意を秘めた真っ直ぐの澄んだ目で、理を見た。

「そんな事、ダメだよ」

理の方はと言えば、駄々っ子のような悲痛な表情だ。

「家政婦を辞めてこの家も出れば、そんなに批判される事は無くなると思います」

「ここを出て、家政婦辞めたら、どうやって暮らすの？」

「すぐ近くにマンションを借りて、仕事を見付けて働きながら高校卒業検定を受けて、夢を実現する為に学校にも通うつもりです」

「理さんが困らないように、食事を作りに来て、お部屋も掃除にきますから・・・。今まで通り家の事を完璧には出来ないと思いますが・・・」

澄んだ目で理を真っすぐ見つめ、真織は続けた。

「今の関係をやめて、ただの恋人同士になった方が気楽で、堂々と理さんとお付き合い出来ますし・・・。そうさせてください」

「真織にとってはその方がいいのかい？」

「はい・・・」

「わかったよ。真織がそうしたいのなら・・・。でも、困った時には一人で頑張らないで、すぐに僕に言うんだよ」

「はい」

ーーーーーそうして真織は家政婦を辞めて、家を出ていく事になった。

そして、理の家から徒歩圏の、すぐ近くのセキュリティーのしっかりした、ワンルームマンションを借りて、新しくテイクアウトタイ

プのカフェに勤め始めた。

理と恋人同士になってから、真織はお化粧し、高価な物ではないが、オシャレにも気を配るようになって、見違えるように可愛らしい、素敵な女性に変化していった。

１１月には、高卒検定の試験に合格し、４月からは、製菓専門学校に通うことにもなった。

「ギリギリセーフで願書を出す事が出来て良かったです」

真織は理と手を繋ぎ、枯葉舞う街路樹の広い遊歩道を歩いていた。

「学費の事は僕に甘えていいんだよ」

「今のところ大丈夫です。苦しくなったらその時は遠慮しないで、お世話になりますね」

口ではそう言いながら、甘えてこないだろうな．．．と少し淋しい気持ちになった。

「バイト増やしたんだろ？」

「2時間だけ、レストランのピアノ弾きのバイトを．．．。音大卒じゃないとダメかなと思ったのですが、オーディションで受かって．．．」

「真織のピアノは音大受験でも通用するからな」

「またまた．．．。そこまではいきませんよ」

「カフェのバイト．．．。結構勉強になるんですよ。仕入れ先情報も、ちゃっかり盗んでます」

「結構ちゃっかりしてるよね」

「うふふ・・・」

二人は大きなピアノ専門の楽器屋の前で立ち止まった。
一面ガラス張りのビルで、ガラス越しに美しくスポットライトが当って展示されている沢山のピアノが見える。
2人で目と目を見交わせて、阿吽の呼吸でニッコリ笑い合った。

「ねえ。ちょっと入ってみない？」

「はい」

お店に入って行き、店員さんに弾いてもいいかと尋ねたら、快く応じてくれた。

店員さんお薦めの、透明のスケルトンのグランドピアノを真織は弾いてみる事にした。
ポロン！と音を確かめる。
「このピアノ、澄んだ感じの音で、綺麗・・・」

「弾いてみてよ」
理のリクエストに答えて、真織がそのピアノで、リストの「愛の夢」を弾き始める。

続いて理が、隣の黒のグランドピアノで、その曲にアレンジをつけて、連弾し始めた。
お互いの純粋な愛する心を曲に現したような、美しい、人の心に響き渡るような音だった。

いつの間にか二人のピアノの周りには、人だかりが出来て溢れかえっていた。
携帯で写メをとったり、動画をとったりする人も多数・・・。

「あの人、作曲家の芹沢理だよね？」
「ほんとだ・・・」
「あの女性は？」
「恋人？可愛いね・・・」
「週刊誌で書かれる様な、悪いタイプじゃ無さそうだよね」
「うん。純粋な感じだよね」
「それにピアノ凄く上手いね」
「本当　本当・・・」

お店の店員は、有名作曲家のゲリラライブに大喜び＆人員整理に大わらわでうれしい悲鳴だ。

二人は何曲かサービスして、最後に深々とお辞儀して、手に手を取って、お店を走り去って行った。

「あはははは・・・。楽しかったね」

「いつの間にか沢山の人に囲まれて驚きました」

翌日のスポーツ紙には、連弾する二人の仲睦まじい姿が・・・。
でも、前とはタイトルが変化してた。

『ほほ笑ましい二人。有名音楽家の彼女はスーパーガール？素晴らしいピアノの愛の旋律・・・ゲリラライブの様子・・・』

本当に・・・。１８０度違う展開である。
理の仕事も前より増え、多忙を極めた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

４月に入り、真織はバイトに製菓専門学校に多忙を極めた。
理も仕事に追われ、お互いに会う時間もめっきり減った。

最初は掃除や食事の支度や、理の身の回りの事をやってあげる時間もとれたが、学校に行くようになってからは、気持ち的にはしてあげたくても、実際には出来ない状況が続いた。

真織の大変さを十分理解してる理は、結局新しく通いの家政婦を雇う事にした。

会えなくてもお互いメールのやりとりは毎日のようにしあった。
内容はたあいもない内容だったのだが、それでも心通わせ、お互いに思いやり、理解しあい、良い関係が続いた。

そんなある日の事・・・・。
その日はバイトも無く、学校も突然休校となり、午後から久し振りにゆっくり時間が出来た。

理の家に寄り、家政婦さんに聞いたら、夕方頃には帰って来るとの事・・・。
家政婦さんには早めに帰って貰って、真織が夕食の準備をして、こっそり隠れてサプライズで驚かそうと思い、靴は靴箱に隠し、食事の準備をした。

食事の準備も出来て、綺麗にテーブルセッティングをして、まだか

まだかと待っていたけれど中々戻って来ず、だんだん待ちくたびれて、真織はうっかりとソファーで眠ってしまった。

ハッと目覚めたら、辺りは真っ暗。
仕事部屋から明かりが漏れていて、ボソボソ話し声がしている。

少し開いた扉から様子を見たら、年は真織と同じぐらいか若干上ぐらいのお人形のように可愛らしい女性が、ピアノの長イスで、理の隣に寄り添うように座っていた。
楽しげに笑い合う二人・・・。
それからその女性は理の頬に優しくキスをした。
照れ笑いする理・・・。

物凄くショックだった・・・。
どうしていいか分からず、玄関扉をそっと開け、靴を履くのも忘れて飛び出した。
あの人はだれ?!

（第８話に続く）

第8話　心の遠距離恋愛

真織の住むマンションは、理の家からは歩いていける距離にあった。
そんなに近くに住んでいるのに・・・忙しくてなかなか会えなくて、今日見た理の姿は本当に久し振りだった・・・。

嬉しいはずだったのに、行かなければ良かった。見なければ良かった。
今日理の家に行った事を、真織はとても後悔した。

さっき見た光景が頭の中に焼き付いて離れない。

長イスに仲良く並んで腰かけて、笑顔で見つめ合う二人・・・。
優しいキス・・・。照れ笑いする理・・・。
恐ろしくなって、ブルブル震えてきた。

マンションのエレベーターに乗ってから、靴を靴箱に置き忘れてきた事に気がついた。
足下を見たら裸足だった・・・。
「あっ・・・いけない」

でも、そんな事、どうでも良かった。
酷く疲れて、早く家に入って、ベッドの中に倒れ込みたかった。

あの優しい理が・・・。自分を裏切るなんて・・・。信じられない。
　でも、あの見つめ合う二人の顔が、頭から離れ無い・・・。

シャワーを浴びて、髪の毛を乾かす気力も無く、まだ濡れた髪の状態のまま布団に潜り込んだ。

人の心は永遠じゃない・・・。愛情だっていつか冷める。
理の心は遠い他の人のところに行ってしまったの？

そんな時、携帯が光った。
理からメールだ・・・。
暗闇に時折点滅する携帯のライトをぼんやり見ていた。
携帯を開いて読む気力も起きない・・・。
何度も送られて来て、やがて、電話がかかって来た。
電話に出る気持ちも起きなかった。

昨夜、濡れた髪の毛のまま寝たからか、今日は体が怠い・・・。
でも、学校に行かなきゃ。バイトだってある。
携帯の電話の着信履歴を見たらかなりの数、理から電話が入っていた。

今の私、嫉妬の炎が音を立てて燃えがってるのかもしれないな・・・。

ふと優璃愛の事が思い浮かんだ。
嫉妬に狂った女の醜い姿・・・。
私も同じようになっちゃうのかしら？
あんな風にはなりたくない・・・。
もし、理の心が離れてしまったのなら、私はどうすればいい？
離れた心をつなぎ止めようと執着するのは愛情じゃない・・・。
本当に愛してるのなら、手放す事が本当の愛かも・・・。愛する人に最後にしてあげられる最大限の愛なのかも知れない・・・。
それが自分にできるのかどうかは自信が無いけれど・・・。

何とか気力を振り絞り、学校に行き、バイト先のカフェに行った。

こんな時だって、いつもと変わらず日々の事をこなせるものだ。
「いらっしゃいませ」
出来るだけ明るい声を出した。
「真織ちゃん、久し振り」
「えっ」と思って見たら、西宮祐也だった。
周りから歓声が上がる。
「お久しぶりです」
「何か顔色悪いみたいだけど、大丈夫？」
「えっ。そんな風に見えますか？」
「実は、頼みがあるのだけど・・・。話す時間できるかな？」
「後少しでバイトが終りますから、その後なら大丈夫ですよ」
バイトが終ってから、祐也の車に乗り込み、話しを聞いた。
「実は、真織ちゃんの声が澄んでいて綺麗なので、コーラスお願い出来ないかなと思って・・・」
きっと普段の自分だったら、断っていたと思うが、今日は違っていた。
このモヤモヤした気持ちをどうにかやり過ごしたくて、普段やった事のないような事をやってみたかった。
ちょっと自棄になりたいというか・・・・。
それに前に、祐也のレコーディングを手伝った時に、普段穏やかな

理が烈火のごとく怒ったあの時の情景が浮かんできた・・・。
今日はなんとなく、理の嫌がりそうな事をあえてして見たいような・・・そんないけない気持ちが沸き起こった。

二つ返事で、「いいですよ。」と言った。

すぐウンとは言ってもらえないのを覚悟していた祐也は驚き喜んだ。
「まさかすぐ了承してくれるとは思わなかったから、凄く嬉しいよ。これからすぐにスタジオに来て貰っても良いかな？」

「今日は暇ですから、大丈夫ですよ」
気持ちとは裏腹に、明るく振る舞った。

その時携帯が光った。理からのメールだ。
そして、電話がかかって来た。
真織はすぐに電源をオフにした。

スタジオに入って、言われるまま歌ってみた。
曲は去ってしまいそうな愛に戸惑い、引き止めたいのに素直になれない、切ない曲だった。
丁度今の自分とリンクして、めいっぱい感情を込めて歌う事が出来た。
祐也とのハーモニーの曲・・・。

素人だから、プロと比較したら歌唱力や技法など劣る所もあるが、逆に素人っぽい素直な伸びやかさが熟練した祐也の声と溶け合って、非常にいい感じの出来になった。
それに、素人にしては上手い方だった・・・。
声の質も澄んでいて透明感があって、聞いていて心地良さの残る声だ・・・。

音楽プロデューサー大絶賛となった。

「いいよ！すごくいいよ！！」

プロデューサーとスタッフのブラボーの大連発！！

皆のスタンディングオベーションに照れまくって、ついさっきまで凹んでいたモヤモヤした自分が吹き飛んだ。

スタジオから家まで祐也に送ってもらい、マンション前の道路で降ろしてもらった。

「今日はありがとうございました。とても楽しかったです」

「こちらこそ、助かったよ」

「実は凹んでいる事があったので、それが吹き飛んで元気が出ました」

「そうだったの？　でも、元気になって貰えて良かったよ。またお願いしても良いかな？」

「はい」

「それじゃあ・・・」

「さようなら。おやすみなさい」

にこやかに手を振って別れた。

車が見えなくなるまで見送ってから、マンション入り口に向おうとしたその時だった・・・。

「真織・・・」

声がして、ふと見たら理だった。

理を見た途端、笑顔だった自分の顔が曇るのを感じた。
「理さん」
「どうしてメールにも電話にも出ないの？　今のは祐也じゃない？」
「私、最近忙しいんです。なにしに来たんですか？」
物凄くキツイ冷たい口調になっていた。
「何か怒ってるの？」
「何も怒ってません」
「いつもと全然違うじゃないか」
「いつもって、最近お会いしましたか？」
「なかなか会えないから、怒ってるの？」
「別に」
こんなに拗ねて怒っている真織の姿は珍しい・・・。
明らかに様子が変だと理は感じた。
「絶対変だよ。話しあおう」
そう言って、理に手を掴まれて連れて行かれそうになったので、強く振りほどいた。
「今日は疲れてるので、帰って下さい！！」
「いったいどうしたんだよ！」

「帰って！！」
自分でも信じられないぐらい大声を張り上げた。
理の青ざめた驚いた顔が目に焼き付いた。

「真織・・・一体どうしたんだよ」
理が抱きついてきた。

「いやっ！！」
振りほどこうとしたけれど、理の力のほうが強くてもがいている状態だった。

「真織」
暫く抱きしめられたままになっていた。

「ねえ、ちゃんと向き合って話しあわないと分からないだろ。言いたい事があるなら言って欲しいよ」
確かにそのとおりだ・・・。

「うちに来いよ」
理に手を引かれるまま、理の家に連れて行かれた。
理の家に上がって、ソファーに座って、真織は俯いていた。

「急に人が変わったみたいになって、一体どうしたの？　何か気に触る事でもしたかな？」

「私見ちゃいました。」

「えっ？」

「昨日、ここに来たんです。食事の支度をして、驚かそうと思ってずっと待ってたら、いつの間にかソファーで寝てしまって・・・」

「仕事部屋で、若い女の子とピアノの長椅子に寄り添うように座って、仲良く見つめ合う二人を・・・。そして彼女がキスをして・・・。理さんが照れ笑いして・・・」

それまで深刻な顔をしていた理の顔が緩んで、物凄い勢いで「プッ」と吹いた。

そして、ゲラゲラ笑いだした。

その反応に余計むかついた。

「そんなに可笑しいですか？」

「ごめんごめん・・・じゃあ、焼きもちを焼いて怒ってるんだね」

「さあ、どうでしょうね」

真織はプイとすねた顔をした。

理のその態度が物凄く不誠実な人間に見えた。

「あの子は確かに可愛らしいよね。夢見芽衣花（ゆめみめいか）ちゃんって言うんだけど・・・。知らない？」

「知りませんそんな人」

口をとがらして拗ねる。

「やっぱり・・・。真織はテレビを見ない人だから知らないんだ・・・」

「何が言いたいのでしょうか？」

もういい加減にして欲しいと、頭から湯気が出る寸前状態だった。
「彼女は彼・・・。ニューハーフなんだけど・・・」
「え・・・」
その途端、今までの自分を思い出して急激に恥ずかしくなった。
「ニューハーフなんですか？」
「そう。結構有名なニューハーフアイドル歌手なんだけど・・・。あの時、照れ笑いって言うか、ドン引きしてしまった状態だったんだけど・・・」
「恥ずかしい・・・」
真織は顔を真っ赤にして、手で覆い小さくなった。
そんな真織を後ろから優しく抱きしめた。
「いつも穏やかな姿しか見た事がないから物凄く驚いたよ。だけど、それだけ思ってくれてるって事だから嬉しいよ」
「私ったら・・・。昨日は気が動転して、裸足で家まで帰っちゃって・・・」
「裸足？」
靴箱の扉を開けたら、可愛らしく真織の靴がキチンと揃えられて残されてた・・・。
それを見て二人でゲラゲラ笑った。
「結構焼きもち焼きなんだね」

「自分でも気がつきませんでした」

「それに、物凄い力強いね」

「え？」

「腕を振りほどかれた時、スパッとね・・・」
見たら、腕に切り傷が・・・。
爪がぶつかって、切れたようだ。

「まあ、ごめんなさい・・・。どうしましょう・・・」
オロオロと慌てふためく真織に理がふと笑った。

「このぐらい大丈夫！！」

「さっき抱きつかれた時、振りほどこうと思ったら、とても強くて、男の人だなぁって思いました。理さんって、とっても力が強くて逞しくて・・・。かなわないなって・・・」

「逃げられたら困るって必死だったからね・・・」

「これからは、問題が起きてもお互いに逃げないで、向き合って何でも話し合って解決していこうね」

「はい。本当にごめんなさい」

「で・・・。早速気になるんだけど・・・。真織は何で、祐也の車から降りてきたの？」
理が意地悪そうな怖い顔をして、顔を近づけて迫ってきた。

（第９話に続く）

第9話　謎のシンガーＭＡＯ

「えーっ。ＣＤに参加？！　しかもコーラスで、デュエット？！」

「そうなんです」

「思い切った事をしたね」

「多分、普段の私だったらお断りしていたと思うのですが、気持ちがモヤモヤして、いつもと違う自分になりたかったと言うか、思い切った事をしてみたくなって・・・」

「で・・・。どうだった？」

「とても楽しかったです。あれが最初で最後だから、きっといい思い出になると思います」

「楽しかったみたいだから良かったね。でも、祐也とデュエットとは焼けるな」

ちょっと不満顔で、焼きもちを妬くそぶりをみせる。

「え・・・ま・・・まあ・・・あれが最後ですから・・・許して下さいね！！」

先程とは体制逆転で、一生懸命理を宥める真織・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

あのＣＤが発売されて、思わぬ反響を呼んだ。

祐也とデュエットしているＭＡＯと言う謎の女性シンガーは誰だ？

あの曲のリクエスト数はうなぎ上りで、とうとうランキング1位にまで上がるように・・・。

「理さん。どうしよう・・・。あんなに受けるとは思わなくて・・・」

「僕も聴いたけど、確かに凄く良いよ。僕の曲にも出て欲しい気持ちもするな」

「理さんの曲なら喜んで・・・。でも、有名にはなりたくはありません」

「このまま、顔の分からない謎のシンガーで通せば良いじゃない。今は、テレビに出演しないシンガーも多いからね」

「じゃあ謎のシンガーＭＡＯで通します」

「ＣＤって売れると、印税が凄く入って来るんですね」

「最近はＣＤはそれ程でもないけど、音楽ダウンロードとか、公共の電波で配信されたりすれば、著作権料がかかるからね」

「お陰様で、追加で参加費を振り込んでくださって、来年の学費の分は楽々払える事になりましたが・・・」

「あの曲・・・。凄く切ない感情表現が現れているけど、何か秘密でもあるの？」

理が意地悪そうな顔をした。

本当は分っているけれど、祐也とデュエットと思うと、突っ込みを入れて虐めたくなってしまう・・・。

「あれは、ほら・・・」
真織が顔を赤らめた。
謎のシンガーＭＡＯの反響はおさまるどころか、益々熱を帯びていた。
あの歌手がＭＡＯだとか、私がＭＡＯでしたとか、偽ＭＡＯまで現れる始末・・・。
「ＭＡＯが独り歩きしてるって感じで、困惑してます。大スターの祐也さんだから、話題性があるんでしょうね。」
苦笑した顔の真織。
「いや、確かに真織の声はいいよ。僕の曲にも是非使いたいって思うもの・・・」
「本当ですか？」
「本当に・・・。でも、もし、話題に上がって、反響が大きくなり、真織が表舞台に引きずり出されて、迷惑がかかったらって思うと、ブレーキがかかってしまうんだ」
「理さんのお役に立てるなら、お力になりたいです」
「大丈夫？」
真織はニッコリうなずいた。
理の自宅スタジオで、理はグランドピアノを弾いて真織に聴かせた。
「この曲なんだけど、どうかな？」

「心に優しく響く、とても綺麗な曲で、感動しました。ちょっと鳥肌立っちゃいました」

「ちょっと歌ってみてくれる？」

理がピアノを弾き始め、真織が楽譜を見ながら歌い始めた。

「結構キーが高いですね」

「上のキーは結構高くて、声が出し辛いかも知れないけど、訓練で出るようになるからそれは大丈夫！」

何度も何度も練習して、楽々上のキーが出るようになった。

「理さん、声が出るようになると、快感って言うか、とても清々しく気持ちが良くて、気分が高揚してきます」

「なんか僕の方が、高揚してくるよ。凄く綺麗で心に響いてくる感じで・・・。素晴らしいよ！！」

理　作詞・作曲、歌　ＭＡＯで、清涼飲料水のＣＭで流れるようになった。

美しい森の中に流れる清らかな川に、妖精の姿をした人気女優が登場する映像に、ＭＡＯの澄んだ歌声が流れる・・・。

初めは、その女優が歌っているのかと噂になったが、祐也とのデュエットで話題になった、シンガーＭＡＯだと言う事が分かり、謎のシンガーＭＡＯの曲は、その年のレコード大賞新人賞にノミネートされた。

「まさか賞にノミネートされるなんて！！驚いてます。やっぱり理

さんの作った曲は、素敵だから・・・」

「真織の透明感のある綺麗な声の歌がいいから、世に認められたんだよ」

「大賞には出席しなくても大丈夫でしょうか？　まだ学生だし、勉強したい事、やりたい事が沢山あって、あまり有名人にはなりたくないので・・・」

「大丈夫！！　あのＣＭの映像を流して、文章で受賞の言葉を述べれば・・・」

「まだノミネートで、受賞じゃないですよ！」

「いや、決まりだね！！」

そして・・・・。

作詞・作曲大賞は、芹沢理

レコード大賞新人賞は　ＭＡＯ

レコード大賞は　イリュージョンの西宮祐也＆ａｍｐ；ＭＡＯ

で決まった。

２ちゃんねるでは、アンチＭＡＯが『賞を貰うなら顔出せ！！』とか、『お高くとまりすぎ』　とか騒がれたが・・・。

何とか、それ以上は批判は受けずにすんだ。

あの2曲でＭＡＯは終りにしようと思っていたが、ＭＡＯの歌が聞きたいと言う反響があまりにも強くて、それからも、時々、理の曲に参加したりした。

「今度の曲なんだけど・・・。どうかな？　聴いてみて」

「わぁ。素敵・・・。これはデュエット曲？」

「うん。デュエットの相手を誰にしようか考え中なんだ」

「タイトルが　”永遠に・・・”？」

「純粋で透き通った清らかな愛情の歌なんだ」

「私が歌うなら、理さんと歌いたいです・・・」

「ぼ・・・僕と？」

「はい。だって・・・。私が愛する人は理さん一人だから・・・。他の人と一緒に愛の歌は歌えないです」

目を伏せて、はにかみながら真織が言った。

「じゃあお試しに・・・。一緒に歌ってみようか」

「はい」

『永遠に・・・』は、大評判でシングルチャート　トップ1に君臨し続けた。

作曲家　芹沢　理と　謎のシンガー　ＭＡＯとのデュエットは話題

にのぼり続けた。

反響が大きいと、あらぬ噂が出たり、嫉むものの批判を浴びたりするもの。

ＭＡＯは実は、著名な歌手の音声を勝手に合成して作った、架空人物だったとか・・・。

だんだん批判的な声が強まっていった。

「そんな事ないのに・・・。あらぬ噂を立てられて、理さんが批判されるのは辛いし、もう我慢出来ません」

「気にしなくても良いよ。こう言う仕事をすれば、批判も色々されて、いやな話も耳に入るもんさ」

「でも・・・」

「気にしない。　気にしない・・・」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

季節は夏となり、フュージョンのサマーコンサートツアーが始まった。

真織には計画があった。

理が批判され続けるのはとても我慢出来ない・・・。

祐也にある計画を打ち明けて、相談していた・・・。

そして、サマーツアー　最終　夢道館コンサート！！

祐也に招待された真織は、理とアリーナ最前列席に座っていた。

コンサートフィナーレとなり、一度会場を去った祐也とメンバーがアンコールでまた現れ、祐也がマイクを握った。
「イリュージョンコンサートに来てくれたみんな！！今日はどうもありがとう！！今日は皆にサプライズがあります。」

「今日は、会場に僕の親友　作曲家の　芹沢　理が来てます。そして、彼女も・・・」
『彼女』と聞いて、どよめきと、歓声と、中にはガッカリする「えーっ」と言う声も・・・。

「理、真織ちゃん。ステージに上がってきてくれ！！」

理は勘弁してくれよ！と言う感じに、手を降りジェスチャーした。
そんな理を、真織が手を引っ張って、ステージに連れて言った。
「真織、やけに積極的だけど、どうしたの？」

「実は、祐也さんにご相談して、サプライズがあるんです。さあ」

（第１０話に続く）

第９話　謎のシンガーＭＡＯ（後書き）

エンティングがちょっと一昔前のドラマのような展開で、作者本人もお恥ずかしい気持ちですが・・・。
初期の作品ですので、未熟な点はお許し下さいませ・・・。
書き直そうかと思いましたが、こんな時期もあったんだとそのままコピペでＵＰする事にしました。

第１０話　愛は永遠に・・・。

真織は理の手を引いて、ステージに上がった。
祐也からマイクを受け取って、深呼吸した。

「皆さん、初めまして！　ＭＡＯです」
その瞬間、物凄いどよめきが起こった。

そして、続けて祐也が続けていった。
「ＭＡＯとのデュエット曲『素直になれなくて』を聴いてください」

理は仰天して固まったまま突っ立っていた。

真織は祐也と一緒にステージ中央に立った。
切ないイントロが流れる・・・・。

真織は、理が心変わりしたのだと勝手に思い込んで、焼きもちを焼いて、悲しんだ、あの時の事を思い浮かべ、切なく悲しい愛の歌を思いきり歌った。

歌い終って、割れんばかりの拍手が巻き起こった。

それから、ステージ端に固まって突立っていた理の手を引いて、ステージ中央に戻ってきた。

「今日は、祐也さんのご好意により、この場をおかりしました。祐也さん、メンバーの皆さん、ありがとうございます。　イリュージョンのファンの皆さん、お時間とらせてしまってごめんなさい」

「私がＭＡＯです。　今まで、表に出なかったのは、私はまだ学生で、夢に向って勉強中で、静かな環境で、勉強に集中したかったからです」

真織は理を見ながら、

「皆さん、作曲家の　芹沢　理　さんです。拍手ー！！」

「私は３年前、芹沢さんの家政婦として、働き始めました。それが、彼との出会いです」

理をもう一度見てから続けた。

「あの時の私は、生きる事に精一杯で、自分の幸せなど全く考える余裕もありませんでした」

「なぜなら、高校１年生の夏、レストランを経営していた両親が強盗に殺害され、兄もその時襲われ頭を強打され、植物状態となり３年と少し前天国に旅立ち、私は突然独りぼっちになってしまったからです。それまでは、家族仲良く笑いの溢れた温かで、幸せな何不自由ない生活を送ってまいりました」

涙目になって、声を震わす真織に理がそっと肩を抱いた。

また理を見上げて、真織は続けた。

「高校を中退し、１８歳まで施設にいましたが、そこは辛い場所でした。しつけと言う名目で暴力行為も日常茶飯事に行われ、施設で出来た同じ年の仲の良かったお友達は、性的暴力も受け施設を飛び出し、彼女とは別れ別れになりました。私も何度も危ない目にあい、何度も逃げ出し、山で野宿して一晩明かした事もありました。　こんなひどい状況に置かれて、パニック障害　となりました」

会場からはすすり泣きが聞こえた。

「湿っぽくなりましたね。ごめんなさい」

「それから、家政婦として働くようになり、偶然、理さんの家に派遣される事になり、出会う事になりました。その当時は、安物の衣服を着て、貰ったボロボロの中古の自転車に乗り、化粧もせず、最終学歴中卒の凄く地味な子でした。そんな私に嫌な顔をせず、優しさと幸せと、愛する真心をくれたのが彼です。私の大切な人です」

「その大切な人が、私が謎のシンガーＭＡＯとして歌い始めてから、あらぬ噂を立てられ、批判されて、とても心傷めてました。だから、この場をお借りして、ＭＡＯは実在の人物だと言う事を、公表したいと思い、この場をお借りしました。どうか、あらぬ噂を立てて、理さんを批判しないでください。お願いします」

祐也がバトンタッチして、ファンに呼びかけた。

「皆。ＭＡＯの歌を聴きたいかー？」

会場から割れんばかりの拍手と歓声が上がった。

「それでは、理　作詞・作曲　清涼飲料水のＣＭでおなじみの、この曲聞いてください」

真織は、真心を込めて思い切り歌い、最後に理とのデュエット曲を歌った。

理はマイクを持ち、大きな声で言った。

「僕はこれからもずっと、真織を支え続け大切にする事をここに誓います」

「真織！！　学校卒業したら、僕と結婚してくれー！！」

拍手喝采、会場は大盛り上がり、大歓声の嵐が巻き起こった。
翌日のテレビ番組は、この事で大騒ぎとなり、真織の通ってる学校周辺や、家周辺など取材で大騒ぎとなったが、何とか学校も卒業を迎える事が出来た。

そして・・・。

製菓学校終了賞を理に見せて、
「無事、卒業する事が出来ました」

理は、優しい笑顔を見せて
「おめでとう・・・。これは婚約指輪なんだけれど、受け取ってくれる？」
リボンのかかった指輪ケースを真織に渡した。

真織が開けたら、可愛らしい指輪が出てきた。
シルバーの小さなシェルの上に、真珠のイメージのダイヤがきらりと輝いている。
「これはマドレーヌ？」

「そう。初めて真織から貰ったマドレーヌのストラップ、とても嬉しくて、僕の宝物だから・・・」

「理さん、ありがとう・・・」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

真織は、カフェをオープンさせた。
場所は三軒茶屋。

カフェ代表取締役社長は理、カフェ店長は真織。
『ＯＳＡＭＵ＆ＭＡＯＲＩ　　ｃａｆ？』と言う名前にした。
店内中央にはグランドピアノを2台置き、時々真織や理が弾いたり連弾したり・・・。
時には、祐也飛び入りのゲリラ　ライブもあったり・・・。
ケーキやお茶がおいしいお店と大評判で、著名人も多く来店した。
出会ってから４年ーーーー
理　３２歳、真織２５歳、二人は晴れて結婚することに・・・。
「理さん、随分と待たせてしまってごめんなさい」
「いいんだ。真織が失った時間を取り戻させてあげたかったんだ。夢を実現させてあげる事が出来て嬉しいよ」
「本当に・・・。私は理さんとめぐり合う事が出来て、幸せ・・・」
二人は微笑んで見つめ合った。
結婚式の二次会は、理と真織の　カフェにて・・・。
これから更に幸せな時間が、きっと永遠に続いていく事でしょう・・・。
理が思い出して笑った。
「真織と初めて会った時の事・・・。思い出すなぁ。　とっても地味な女の子で、骨董品のような自転車に乗って・・・。だけどすぐに、次の日に会うのがとても楽しみになってしまって・・・。きっと初めて会った時からすぐに僕は恋しちゃったんだ・・・」

真織ははにかんで、頬を染めた。

それから更に1年後ーーーーー
理の家にて・・・。

「真織最近働きすぎじゃない？　顔色悪いし、調子悪そうだよ」

「理さん、暫くスタッフにお店を任せようかなって思ってるの」

「うん、そうだよ。無理はしないほうが良いよ。暫くゆっくり休んだほうが良いよ。仕事も一段落したし、旅行に行こうか？　バリ島なんてどう？」

「ううん。旅行は今度にする」

「行きたくないの？」

「ううん。とても行きたいけど、行けなそうだから・・・」

「えっ？」

「あのね・・・」
真織は理の手をとって、そっと自分のお腹に当てた。
「赤ちゃん・・・。出来たみたい」

「えっ」
理は大喜びで、飛び上がって喜んだ。

—
—
—
E
N
D
—
—
—

第１０話　愛は永遠に・・・。（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございました。
創作小説処女作品・・・未熟ですが、懐かしい作品です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0802u/

天使の焼いたマドレーヌ

2011年7月14日00時57分発行